

みよう ぱる

女原遺跡 6

— 第2次調査報告書 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1274集

2015

福岡市教育委員会

福岡市西区

みよう ぱる
女原遺跡 6

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1274集



遺跡名	女原遺跡	調査次数	2次	調査略号	MBR-2
調査番号	8626	分布地図番号	120周船寺	遺跡登録番号	0688
申請面積	27,000m ²	調査対象面積	1,700m ²	調査面積	1,622m ²
調査期間	昭和 61(1986)年 7月 18日~9月 4日				
調査地	福岡市西区大字女原字原田				

平成 27 年
 福岡市教育委員会

序

アジアの拠点都市、またアジアのリーダーを目指している福岡市は、市内のいたる所で都市開発が進んでいます。なかでも西区今宿平野のJR筑肥線「九大学研都市駅」周辺は、伊都土地区画整理事業や九州大学の西区元岡への統合移転に伴い、目覚ましい発展を遂げています。

本市では都市開発の推進と同じように恵まれた歴史的遺産の保護、活用も重要な課題と考えています。都市開発などの工事でやむなく影響を受ける遺跡については、発掘調査によって詳細な記録を残し、その成果を広く公開、活用するよう努めています。

今宿平野に面した女原地区で計画された「女原地区圃場整備事業」に伴って昭和60年から2か年に渡って発掘調査を行いましたが、本書は第2次調査の報告書です。

調査から刊行まですでに28年が経過しましたが、この間、地元組合の皆様をはじめ多くの関係者の方々よりご協力、ご理解を賜り、ようやく刊行することが出来ました。心からお礼と感謝を申し上げます。

最後になりますが、本書が、埋蔵文化財への理解と認識を深める一助となり、さらに学術研究や学校教育などの資料としても活用いただければ幸いです。

平成27年3月25日

福岡市教育委員会

教育長 酒井 龍彦



現在の女原遺跡第2次調査地（2015年1月撮影）

例言・凡例

1. 本書は、福岡市西区女原地区圃場整備に伴い、福岡市教育委員会が昭和61年7月18日から同年9月4日まで実施した女原遺跡第2次調査の発掘調査報告書である。なお本書の作成は、平成26年度の国庫補助金を受けて行った。
2. 発掘調査は力武卓治が担当したが、西区野方久保道跡の発掘を担当していた下村智、常松幹雄と一緒に協力しながら実施した。
3. 周辺地形や遺構の平板測量は、池田由美、滝良子発掘作業員が主に担当したが、その他の遺構や土層などの実測、作図、撮影は力武が行った。
4. 遺構はローマ字略号をつけ、記述する時は堅穴住居跡:SC1、堅穴SK02のように遺構名、遺構略号と遺構番号を組み合わせ、A～D地区で通し番号としている。
堅穴住居跡:SC　　堅穴:SK　　溝、溝状遺構:SD
5. 本書に使用している周辺図や遺構図の方位は磁北で、真北から6度30分西偏している。
6. 出土遺物の整理作業は、主に発掘終了後に行い、本書の発行に因る遺物実測、トレース、遺物撮影、編集、執筆などは力武が行った。
7. 図示した遺物は通し番号とし、縮尺は砥石1点を1/2とした他は、すべて1/3に統一している。遺物の観察や時期などについて、文化財部の諸氏から教示を受けた。
8. 遺物写真的縮尺は、砥石1点を原寸とした他は1/2としている。遺構全景や発掘作業風景に加えて28年後の現在の様子も撮影し掲載している。
9. 女原遺跡では、現在までに計7次の発掘調査を行い、その都度新しい知見を得てきた。第2次調査時点では不明だった遺構が明らかになり、女原遺跡全体を考える上で重要であることから、本書では第2次調査以降の調査成果も参考にして記述している。
10. 女原遺跡第2次調査の発掘調査で得られた出土遺物と図面、写真などすべての記録類は、福岡市埋蔵文化財センター（福岡市博多区井相田2-1-9）に収蔵、管理する予定である。研究者だけでなく誰もが検索し実見出来るので、地域の歴史研究や学校教育など広範な活用をお願いする。



A地区の発掘作業



B地区の発掘作業



C地区の発掘作業



D地区の発掘作業

本文目次

第1章	はじめに	5
第1節	調査の経緯と報告書刊行に至るまで	5
第2節	事前協議と試掘調査	6
第3節	調査の組織と構成	7
第2章	女原遺跡の位置と周辺の遺跡	9
第3章	発掘調査の記録	10
第1節	第2次調査地と調査区	10
第2節	調査日誌	12
第3節	各地区の調査（遺構と遺物）	14
1.	A地区（水田部）	14
検出遺構と出土遺物		
2.	B地区（東西道路西端部）	18
検出遺構と出土遺物		
3.	C地区（東西道路東端部）	24
検出遺構と出土遺物		
堅穴SK01	24	
堅穴SK02	25	
堅穴住居跡SC01	26	
4.	D地区（東端排水路部）	29
遺構と遺物		
溝SD02～07	29	
第4章	おわりに	32

挿図・写真目次

＊写真類も図と同じFigとして通し番号にしている。

Fig. 1	試掘トレンチの土層図（縮尺平面1/800　断面1/80）	6
Fig. 2	圃場整備前の水田と試掘トレンチ位置図（縮尺1/2,000）	7
Fig. 3	女原遺跡と周辺の遺跡分布図（縮尺1/25,000）	8
Fig. 4	圃場整備造成工事計画図と調査地区配置図（縮尺1/2,000）	10
Fig. 5	女原遺跡第1～7次調査遺構全体図（縮尺1/3,000）	11
Fig. 6	A地区の検出遺構全景（西から）	14
Fig. 7	掘立柱建物跡SB01（縮尺1/50）	14
Fig. 8	A地区の遺構平面図（縮尺1/150）	15
Fig. 9	A地区の出土遺物図（縮尺1/3）	16
Fig. 10	A地区の出土遺物（縮尺1/2）	17
Fig. 11	B地区の遺構平面図（縮尺1/200）	18
Fig. 12	B地区の南壁土層図（縮尺1/80）	19
Fig. 13	B地区の南壁と遺物出土状況	19
Fig. 14	B地区の出土遺物図①（縮尺1/3）	20
Fig. 15	B地区の出土遺物①（縮尺1/2）	21
Fig. 16	B地区の出土遺物図②（縮尺1/3）	22
Fig. 17	B地区の出土遺物②（縮尺1/2）	23
Fig. 18	C地区の全景	24
Fig. 19	C地区の遺構平面図（縮尺1/200）	24
Fig. 20	C地区の南壁土層図（縮尺1/80）	25
Fig. 21	竪穴SK02（縮尺1/50）	25
Fig. 22	包含層と竪穴SK02の遺物図（縮尺1/2、1/3）	25
Fig. 23	包含層と竪穴SK01の遺物（縮尺1/1、1/2）	25
Fig. 24	竪穴住居跡SC01（縮尺1/50）	26
Fig. 25	竪穴住居跡SC01（東から）	27
Fig. 26	竪穴住居跡SC01（南から）	27
Fig. 27	竪穴住居跡SC01（南東から）	27
Fig. 28	竪穴住居跡SC01の遺物図（縮尺1/3）	28
Fig. 29	竪穴住居跡SC01の遺物（縮尺1/2）	28
Fig. 30	D地区の遺構平面図（縮尺約1/300）	29
Fig. 31	D地区の測量作業風景（南から）	29
Fig. 32	D地区の出土遺物①（縮尺1/2）	30
Fig. 33	D地区の出土遺物図（縮尺1/3）	30
Fig. 34	D地区の出土遺物②（縮尺1/2）	31

第1章 はじめに

第1節 調査の経緯と報告書刊行に至るまで

福岡市西区女原は、今宿平野に接する低丘陵とそれに挟まれた谷部に位置しており、昭和16年に福岡市に編入するまでは糸島郡に属していた。女原や西隣の徳永の集落は、高祖山（標高416.1m）から今宿平野方向に手指状にのびている低丘陵上に営まれている。谷部には、いくつかの溜池が築かれ、貴重な農業用水として今宿平野を潤している。谷部の傾斜地は、それ程の急斜面ではないが巧みに棚田が作られ、主に稲作が続けられてきた。女原地区は、江戸時代元黒田藩士であった宮崎安貞（1623～1697）が、農民を励まし共に開墾を行った所として知られており、江戸時代の農書として有名な『農業全書』10巻はこの地で著されたものである。

最近の農機具大型化によって不整形で小区画の棚田では非効率であることから、地元で圃場整備組合が組織され、その造成工事が計画された。対象地の平面形は北側に開く長台形を呈し、南北長約600m、山側の台形上辺の幅は約130m、台形下辺に当たる谷開口部の幅は東西約350mを測る。この面積を単年度で完成するには、造成工事方法や国庫補助金の予算規模、さらには休耕面積があまりにも広範囲となるなど多くの問題が生じることから、西の徳永、周船寺に通じる道路を境にして南側を第1期、北側を第2期と2か年に分けて圃場整備事業が行われることになった。

第1期工事に先立って発掘調査した第1次調査は、昭和60年5月27日から同年8月12日の約2か月半に渡って実施した。その調査結果については、平成21年3月末に『女原遺跡4—第1次調査報告書一』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第1053集）を発行している。第1次調査の調査に至る経過については、同書で詳細に記述しているので、ここでは第2次調査に関する経過について記す。

福岡市農林水産局農業振興課からの事前審査願いを昭和60年11月25日に受け、試掘調査を昭和61年1月9、10日の2日間に渡って実施した。その結果を踏まえて、農業振興課、地元の圃場整備組合、そして埋蔵文化財課（事前審査担当班）の三者が本調査に向けて協議を整え、昭和61年7月18日から第2次調査に着手し、夏の猛暑や夕立などの悪天候、さらに迷走台風にも見舞われたが、9月4日に無事に終了した。

この間、地元の池澤組合長には、対象地の境界や野菜栽培範囲などの確認に何度も立ち会いと指示をお願いした。また隣地の三島正三氏には調査事務所の設置場所や水道を提供して頂くなど多くの迷惑をかけた。耕作土剥ぎや移動は重機を用いたが、遺構検出、掘り下げのほとんどは地元の女原地区で雇用した発掘作業員の皆さんに取り組んでいただいた。厳しい炎天下で慣れない作業にもかかわらず、汗を流しながら最後まで頑張っていただき、貴重な調査結果を得ることが出来た。

発掘調査では、安全作業を最優先して共に安全点検、確認を毎日行いながら発掘作業を進めた。また遺跡調査の目的や意味、そして今掘り出している遺構の説明だけでなく、女原地区の遺跡や文化財の重要性についても説明を繰り返した。昼休みを利用して近くの古墳の見学にも出掛けた。地元の方々に、地元の歴史に興味、関心、そして誇りと愛着を持っていただくことが、地域の文化財の保護、保存と活用に直結すると思ったからである。第2次調査報告書刊行の準備は調査終了から始め、第1次調査との合本を目指したが実現することが出来なかった。結局、発掘調査から28年という時間を要したことになり、迅速な調査成果の公表という調査報告書の目的を果たせなかつた。諸般の事情があつたとしても言い訳に過ぎず、ただただ調査担当者力武の怠慢であったと大いに恥じている。記憶は風化したが、日誌や野帳、写真などの記録類を頼りにしてどうにか発行までに至った。

第2節 事前協議と試掘調査

圃場整備は広大な事業面積であることから、発掘期間や発掘費用など厳しい状況となることが多い。遺跡の保護、活用を担当する側からすれば、遺跡破壊や消滅がない、あつてもその面積がきわめて小さいことが望ましい。このためには開発地内での埋蔵文化財の有無、その内容など細かな情報提供が不可欠となる。しかし埋蔵文化財包蔵地の細かな情報を用意し、提供することは、現状では困難で直ちに出来ることではない。そこで開発申請後の事前協議が重要な要素となるが、圃場整備の場合は、耕作地への導水、排水などの水利問題が解決出来れば、広大な面積故に盛り土や区画などの設計変更で埋蔵文化財に影響を与えない工法も期待できる。

埋蔵文化財課では、すでに市内各地で大型圃場整備に伴う発掘調査を経験し、綿密な試掘とその後の事前協議がいかに重要で有効であるかを認識してきた。

女原地区では、前年の第1次調査を無事終了したことが効果を發揮して、細かな試掘や円滑な事前協議に繋がった。設計変更によって発掘面積を最小限度に絞り込むことになり、調査期間や発掘費用などの縮減を実現し、圃場整備事業の完成と遺跡保存という互いの目的や計画を果たせた。

次に試掘や事前協議の経過、そして調査日誌を記すが、これらも発掘調査の成果と同じように重要な記録であり、遺跡を守る上で今後試掘と事前協議についてより一層真剣に取り組むべき重要な課題と考えるからである。

試掘前の協議 第1次調査を終了して約3か月後の昭和60年11月25日に農業振興課から第2期工事の計画説明があり、これを受け12月中旬の試掘計画を返答。12月に池渡溝の廃土で盛り土する計画案が提示され、12月予定だった試掘を翌年1月早々に実施することにした。

試掘結果 昭和61年1月9、10日の二日間実施。対象地のうち盛り土が計画されている場所やまだ栽培中の畑地を除いた範囲に計10本のトレンチを設定し、重機で掘り下げて土層や遺物の出土状況を観察、記録した。

試掘トレンチ1（以下T1のように記す）の南端とT4の西半分で流路状の落ち込みを検出した。この落ち込みは黒色粘土や灰色粘土で埋まっており、この二つのトレンチを通って北側に向かう流路があったと推測した。T4では、その流路の底から5世紀代の土師器の甕や小形丸底壺が沈んだ状態で出土している。T2、5、6、8、10でも同じような黒色粘土の堆積を確認したことから、流路が湿地と思われた。残りのT3、7、9では、現水田面下20～30cmの深さで遺構らしき小ピットや土壤を検出した。

各トレンチの土層観察から対象地内には、浅い谷状の落ち込みに区切られて北側に突き出る4列の微高地が考えられるが、このうちT3、T7、T9の設定場所に当たる2列の微高地には、検出したピッ

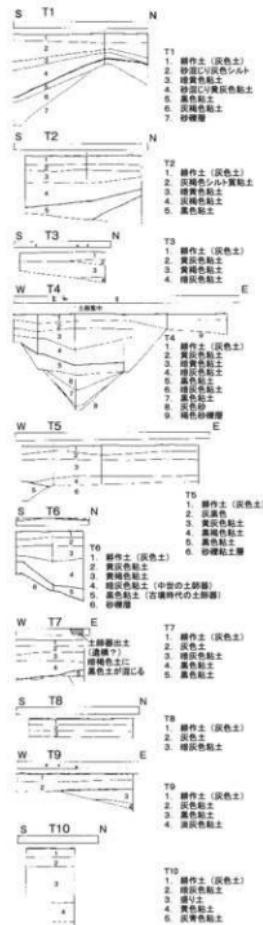


Fig.1 試掘トレンチの土層図
(縮尺平面1/800 断面1/80)

トや土壤などの遺構から掘立柱建物などを主とする集落の存在が考えられ、旧地形と遺跡の範囲をFig.2のように推測した。

試掘後の協議 試掘後から発掘調査着手前まで計6回の協議を重ねたが、試掘直後の1月に5回集中協議をしている。これは次年度の予算措置や発掘担当者決定など両課それぞれの理由によるものであるが、それ以上に試掘結果を最大限に設計に反映するという互いの願いが一致したからである。各会議ごとに諸準備を整え、6月23日に市役所での最後の協議を行い、この後は発掘調査担当となった力武と今宿出張所農業振興課が引き継ぎ、現地で具体的な打ち合わせに入った。

第3節 調査の組織と構成

発掘調査 昭和61年度

事業主体 女原圃場整備組合

調査主体 福岡市教育委員会（埋蔵文化財課） 調査総括 課長 柳田純孝

事前審査 池崎謙二 杉山富雄 調査庶務 岸田隆 調査担当 力武卓治

報告書作成 平成26年度

整理総括 経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課 課長 常松幹雄

整理担当 力武卓治 整理庶務 川村啓子

なお文化財部は、組織改変のため平成24年4月1日付で教育委員会から経済観光文化局へ移管した。

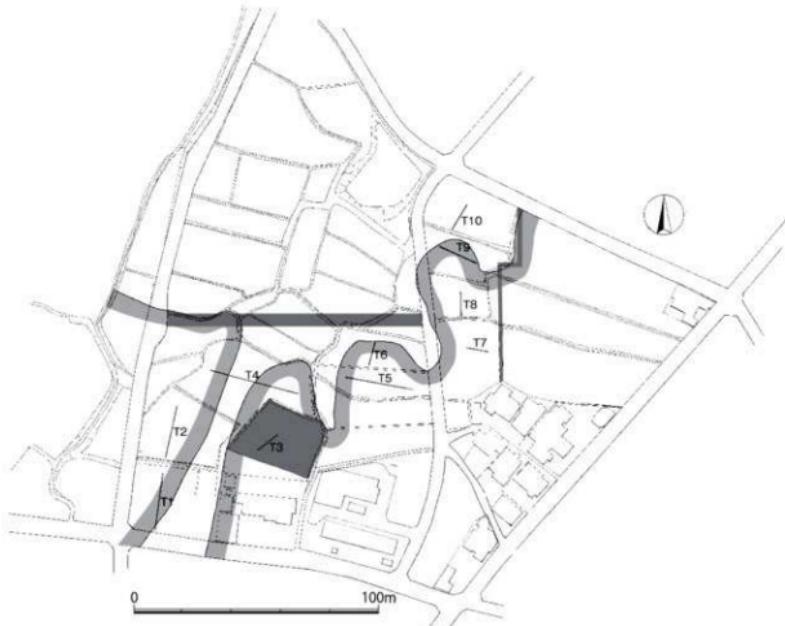


Fig.2 圃場整備前の水田と試掘トレンチ位置図（縮尺 1/2,000）

濃いアミ点は先鋒区、うすいアミ点は拡高地の落ち

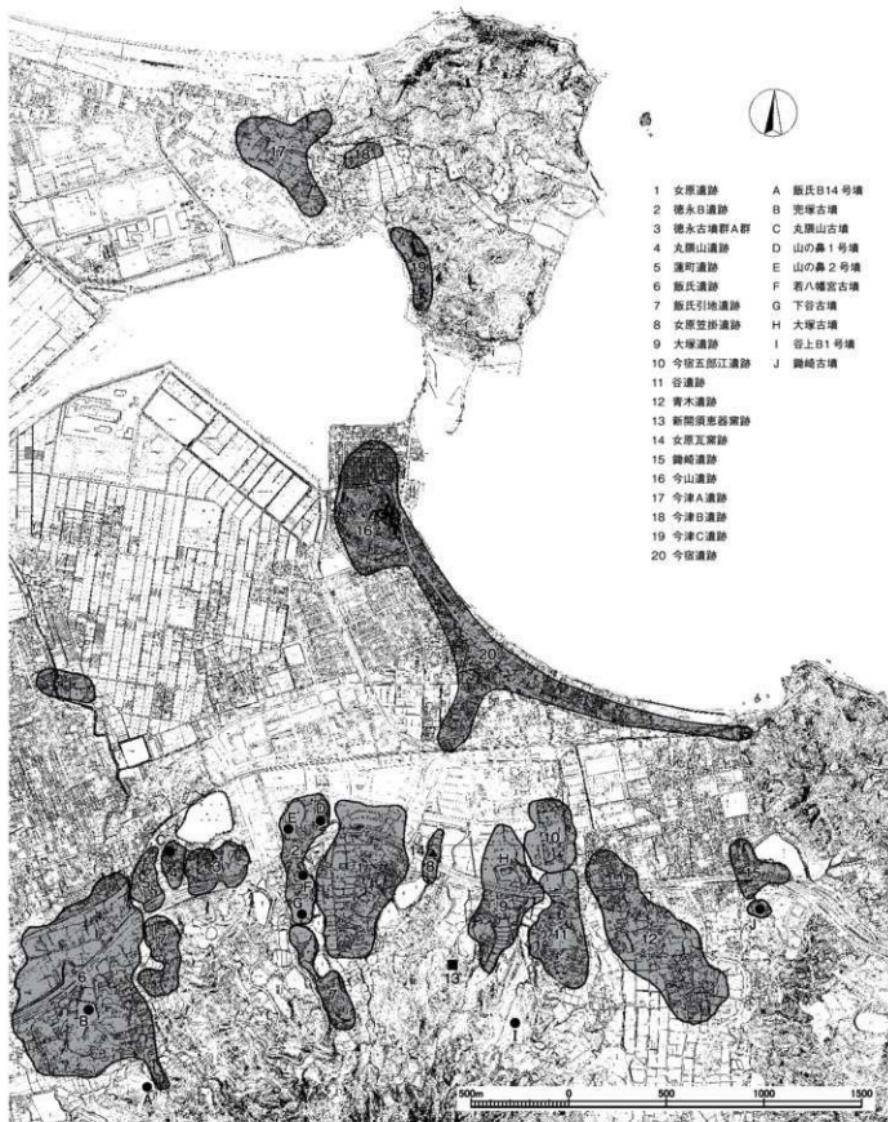


Fig.3 女原遺跡と周辺の遺跡分布図（縮尺 1/25,000）

(下図は福岡市都市計画図)

第2章 女原遺跡の位置と周辺の遺跡

福岡市西区は、早良平野を北流して博多湾に注ぐ室見川を東端とし、長垂山と叶岳山塊を西側に越して糸島半島と糸島平野の一部にまで及んでいる。その海岸線の砂丘は、元寇防壁が築かれていた生の松原から弧状に続き、さらに長垂山から強く彎曲しながら約2kmのびて今津湾に突き出たような今山に繋がっている。この砂丘の南側を今宿平野（東西約6km、南北約2km）と呼び、女原遺跡は先に記しているように高祖山から今宿平野に向かってのびる低丘陵とその谷部に位置している。新設されたJR筑肥線「九大学研都市駅」から南へ約200m歩き、今宿バイパス（福岡前原道路）の高架をくぐると長方形区画の水田が広がっているが、そこが28年前に発掘調査した女原遺跡第2次調査地である。

この今宿平野は、中国魏の史書『魏志倭人伝』に記録されている「伊都國」の東辺に当たると考えられているが、かつては砂丘の南側には後背湿地が形成されていたことを思えば、その可耕地はきわめて狭く、決して生産性の高い平野とは思えない。この今宿平野のみでは、『魏志倭人伝』の「世王有る」を生み出したとはとても考えがたい。やはり伊都国の中核は、三雲南小路遺跡や井原鍵溝遺跡、そして平原遺跡が位置する一帯であって、今宿平野はあくまでもその東辺に過ぎなかつただろう。ところが弥生時代から次の古墳時代、そして古代、中世に至るまで多くの遺跡が分布し、特に国史跡は福岡市内でも集中している地である。その代表的な遺跡をいくつか取り上げ、今宿平野が果たしてきた歴史的な役割や特色について考えてみたい。

弥生時代の石斧製作地として有名な今山遺跡は、今津湾の砂丘の北端に位置し、瑞梅寺川の河口に面した標高82mの小山である。今山の南西側は近世以降の干拓で水田化しているが、弥生時代には南側の砂丘以外は今津湾と瑞梅寺川の河口に囲まれており、小島のような景観だったのだろう。この今山遺跡は、九州帝国大学の中山平次郎博士によって1931年に世に紹介されて以来注目を集め、断続的に発掘調査が行われてきた。露出、転石の玄武岩を材料として弥生時代前半期から石斧を製作し、広く北部九州各地の遺跡に供給していた事が明らかになった。その重要性から平成5年に国史跡となり、ほぼ全山が保存されている。石斧工人達の組織や支配、供給方法など具体的な様子はまだ不明だが、石斧製作の工程技術、規格品的な形態、そして広範囲の供給先などは、現代の効率的生産と製品管理、流通方法に近く、その独占と蓄積は、伊都国成立の大きな力となったであろう。

国史跡ではないが今宿五郎江遺跡と南側に隣接する大塚遺跡は、「伊都区画整理事業」に伴って本格的な発掘調査が始まり、倭人伝「伊都國」とほぼ同時期の大型環溝集落を確認した。その規模は東西長約200m、南北長約270m、今宿平野では唯一の環溝集落である。多量の土器に混じて中国新の貨貝、後漢鏡、楽浪系土器、鋳造鉄斧、小銅鐸、銅鈴、ガラス玉、青銅製鋤先、木製農具、漆製品、そして山陰や東海地方の土器など多種多様な遺物が出土した。これらは国内外各地との交易で入手したと思われ、今津湾という良港に面した地の利を最大限に活かした遺跡である。この環溝は間もなく埋まり始め、集落は環溝外に広がり次の古墳時代を迎える。当然、倭人伝の世界とは異なる政治、権力構造から伊都国への役割は終わるが、大陸や朝鮮半島に近いという地理的位置は変わるものではなく、今宿平野在地の権力者（首長）は自らの存続のために、より一層对外情勢に敏感となり、積極的に对外交渉に取り組んで新技术やその技能工人達の獲得、生産物の独占と活用に乗り出したことだろう。このような経緯を示すのがこの地の前方後円墳や鉄製品生産遺跡である。現在、国史跡の古墳は、山の鼻1号墳、若八幡宮古墳、勧崎古墳、丸隈山古墳、兜塚古墳、飯氏二塚古墳、今宿大塚古墳の7基であるが、既に消滅した前方後古墳まで含めると計13基ある。墳丘や埋葬施設、副葬品の変化から古墳時代のほぼ全期間に渡って築造されたことが分かり、今宿平野における首長の変遷、消長をたどることが可能だ。また新しい横穴式石室の導入などを通じて、朝鮮半島との関係の強さや技能集団の存在も推測出来る。可耕地に恵まれなかつたことが逆に古墳密集地を形成していることから、その集落も他地域と異なる独自の内容、特徴を有している可能性があり、発掘調査には十分な注意が必要だろう。

第3章 発掘調査の記録

第1節 第2次調査地と調査区

女原遺跡は、第1次調査前までは福岡市文化財地図に周知の遺跡としては登録されていなかったが、第1次調査の結果、縄文時代から中世に至る遺構、遺物を確認し、その後の表探や試掘などによって北側の谷開口部に向かって遺跡が広がっていることが確実となり、現在の集落がある東側の低丘陵部を含んで女原遺跡として登録記載している。

第2次調査地は、女原遺跡のほぼ中央部西寄りに当たる。第1次調査地よりも傾斜が緩やかとなりより生活適地と思われ、また山ノ鼻1号墳や若八幡宮古墳など国史跡の前方後円墳がすぐ近くに築造されていることから、集落や古墳に関する遺構の存在が予想された。

圃場整備造成工事計画図によると新しい水田は、東西水路、中央水路や南北道路に区画されて東西に5列あり、このうち中央の3、4列は東西道路を境に4つに分けられている。それぞれの列は北より番号が付され、合計22枚の水田が完成する予定である。当初の計画によれば水田1-2と水田6-3が造成によって遺構面が削平されることになる。水田6-3は、設計をどう工夫、検討しても造成工事の影響を受ける事が分かり、発掘調査対象地とした。水田1-2については、発掘調査直前になってさらに盛り土することで発掘が避けられた。

したがって発掘調査対象地は、水田6-3内的一部分（A地区と呼んだ）と新設される東西道路（西端部をB地区、東端部をC地区）、東西水路（D地区）と中央水路（南端部はA地区と重なる）である。事業地中央の南北道路も本来ならば発掘調査対象地であるが、現在も生活道路として利用されており、また将来的工事計画がないとのことで、今回は発掘調査対象地から外した。

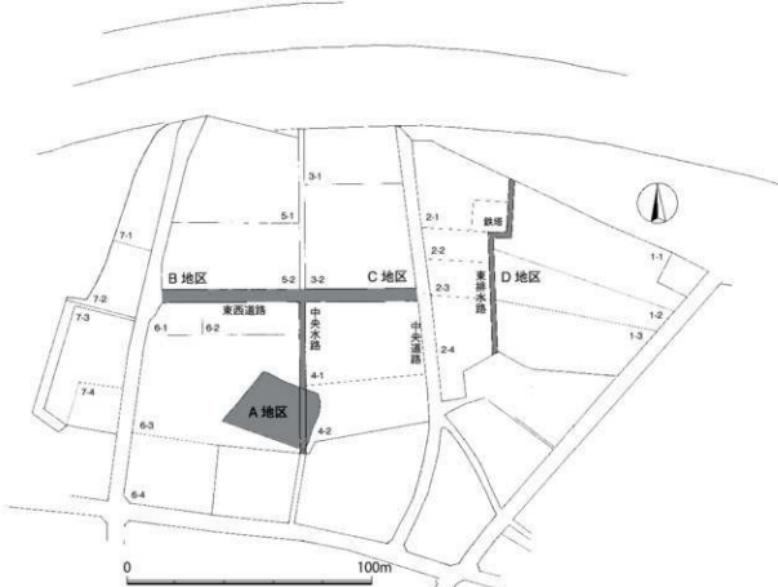


Fig.4 圃場整備造成工事計画図と調査地区配置図（縮尺 1/2,000）



Fig.5 女原遺跡第1～7次調査遺構全体図（縮尺1/3,000）

第2節 調査日誌

7月

日 曜 天気

現地協議、調査内容（野方久保遺跡、博多遺跡、元岡遺跡など）

5 土	雨のち 曇り	昭和61年3月に西区飯盛園場整備の発掘調査を一応終了した力武、下村、常松、加藤の4人は、61年度から博多遺跡と那珂遺跡の2班に分かれた。埋蔵文化財課ではその後も数多くの緊急調査が連続し、1人体制で当たることが予想された。正確な記録保存を果たすには、まずは安全作業が優先、前提であること、そしてカメラや測量機材などの不足もあって4人で連絡を取り合ひ、協議しながら出来るだけ複数配置になるよう工夫した。6月末に那珂遺跡の発掘を終えたが、引き続き7月から博多遺跡に加え、西区野方久保遺跡と女原遺跡の3遺跡を担当する事になり、課会議で下村と常松が野方遺跡を、加藤が博多遺跡を、力武が女原遺跡を担当することになった。本庁での事前協議が無い、発掘直前の現地協議を今宿出張所農業振興課の國崎係員とを行い、発掘着手の順序や農作物の取り扱いなどを決めた。
		7日～12日まで連続の雨。雨の中で野方久保遺跡で建設業者との協議や発掘機材の移動などに追われた。 野方久保遺跡では、11日より表土剥ぎを開始。女原遺跡では農業振興課が約束していた境界杭が雨で完了せず、耕作土剥ぎが出来なかった。
14 月	雨時々 曇り	加藤担当の博多遺跡30、31次調査は終了し、次の調査地に移動する。野方久保遺跡では先週末から表土剥ぎを始めたが、進捗状況を見る。まだ配電盤工事が未完。今年報告書作成する博多区那珂久保遺跡などの遺物を飯盛園場事務所に搬送し、本格的に整理作業に着手する。
15 火	豪雨	野方久保遺跡では、発掘作業員を導入する予定だったが雨で中止。午後は文化課会議に出席する。
16 水	曇り	女原遺跡ではプレハブの調査事務所を建てる地主に挨拶し、明日より盛り土造造成することにした。野方遺跡ではまだユニットやトイレ業者決まり未設置。明日予定の地盤祭も延期とか。女原遺跡後に予定している西区元岡遺跡では先にプレハブ設置場所の盛り土について重機業者と打合せを行う。
17 木	曇り	野方久保遺跡は下村、常松が担当しているが、休憩時間を利用して飯盛園場事務所に集まり今後の調査について協議。特に重機やカメラなどの配慮などについて連絡を取り合うことにする。
18 金	晴れ	午前中は飯盛園場で魔芋作業をlassさせ、女原遺跡に移動し、プレハブ設置場所の耕作土剥ぎを行う。プレハブ設置は22日と決定。農業振興課の境界杭設置はまだ終わっていない。福岡市歴史資料館では「早良王墓」の準備が進んでいるが、本日は王墓副葬品の撮影予定。
19 土	曇り～ 雨曇	女原遺跡では、耕作土剥ぎを始めたが、境界を間違わないように目印に竹竿を立て十分に注意するようにした。 野方遺跡では大学生が調査参加するが、その受け入れ準備を進める。
21 月	曇り	定期技術者会議。本日の会場は福岡市埋蔵文化財センター。課会議に出席する。
22 火	晴れ	野方久保遺跡の堀留墓から把頭飾り付きの細網鋼劍が出土し、大型カメラで撮影にかかる。見学者が相次ぐ。
23 水	晴れ	女原遺跡ではA地区と呼ぶ水田の耕作土剥ぎが終了。野方久保遺跡では、開発業者と排土処理やトイレ設置などを協議。NHテレビ局の取材、撮影があり、猛のニュースで放映された。
24 木	雨後晴	飯盛遺跡の調査工程や次に発掘予定の元岡遺跡と鷹山道路の開始について検討・協議する。
25 金	晴れ	野方久保遺跡では、ようやくプレハブの大ささ決まるが建設はいつになるのか分からない。
26 土	晴れ	梅雨明け宣言。女原遺跡に博多道跡より発掘機材搬入。
28 月	晴れ	女原遺跡では、プレハブの建設始まり。本格的に飯盛調査事務所より発掘機材の搬入をする。発掘作業員が1次調査と同じ部ぶれがそういうことになった。野方久保遺跡に調査参加の大学生到着。
29 火	晴れ	10時に発掘作業員が集合し、早速、安全教育を行ふ。A地区はすでに耕作土を剥いでいるので遺構検出にかかる。暑さ対策でテント2張りを設置し、その下で作業をする。野方久保遺跡に森貞次郎先生を案内し、調査指導を受ける。
30 水	晴れ	朝一番に飯盛調査事務所に行き、測量機材を女原遺跡に運ぶ。女原園場整備の組合長である池さんが来訪。野菜栽培場中の取り扱いについて指示を受ける。三島正三さん宅よりプレハブ用の水をいただくことになる。
31 木	晴れ	A地区の遺構検出は順調に進み、実測用のグリッドを組む。また先に平板測量を発掘作業員の辻さんと池さんが開始。
8月		
1 金	晴れ	本庁で定期会議のため発掘作業は休みだが、重機は、B地区と呼ぶ東西道路の耕作土剥ぎにかかる。 野菜がまだ栽培してあるが、収穫しないといつことで作業が可能となった。
2 土	晴れ	東西道路の耕作土剥ぎを継続する。この間に発掘作業員に周辺古墳について説明する。 また今回の発掘調査の目的や検出が予想される遺構や時代について学習する。
4 月	晴れ	東西道路のB、C地区は、段差のある水田が並んでおり、耕作土剥ぎは時間がかかりそうだ。 飛高係長と今後の調査工程について協議をする。
5 火	晴れ	発掘作業はA地区に集中する。暑さ対策でテント2張りをセットする。耕作土剥ぎをしているB、C地区では、遺構らしき痕跡はまだ見つかっていない。野方久保遺跡は、調査期限が迫ってきた。また次に予定している西区元岡遺跡の着手日も間近となってきたが、現在の職員配置を変えることは不可能で、私が同時に担当するより方法がなさそうだ。
6 水	晴れ	A地区では北東部に遺物包含層があり、掘り下げを行ふ。また遺構検出を終えた部分から縮尺1/20実測を始める。B、C地区は重機で耕作土を除去し遺構検出を続いているが、西端より20 mは遺構の確認はないので、段落ちを確認するためにさらに東側に掘り進め。複数現場を同時に進行しているので測量機器やカメラも必要に応じて移動使用しているが、今日は野方久保遺跡へ運ぶ。
7 木	晴れ	A地区的方眼紙実測用2×4グリッドに移動する。北東部の遺物包含層は予想よりも厚く堆積し、また乾燥して堅くなり、人力では時間がかかるようだ。遺物包含層下で小ピットを確認する、津田課長と折尾係長が発掘現場の安全衛生パトロールで点検に来る。

8 金 快晴	A地区北東部の包含層では人力で振り下げを続いているが、本日より重機を導入し遺構検出を行う。ビットの外には住居跡などの遺構はない。午後野方久保遺跡で調査打合せをし、10日の日曜日から堀留墓検出作業と決める。
9 土 晴れ	発掘予定地である元岡遺跡に移動し、伐採した竹や雑木を片付ける。蜂の巣があり、重機で除去。星に女原に戻り、常松君と調査打合せをする。
11 月 曇り	盆前の少しある発掘作業員が減る。A地区包含層下の遺構検出を継続。ほぼ主な遺構は終了し、織状の落ち込みを精査する。方眼紙実測と平行して1/100縮尺で平板測量を再開する。2時過ぎより夕立となり、そのまま本降りとなる。野方久保遺跡では重機で下層の堀留墓の検出確認を始める。
12 火 晴れ	本日より盆休みのみのため発掘機材やツントを片付ける。また測量機器や重要遺物は本序に移動保管。
13 月 晴れ	原岡遺跡は休んで発掘期限の迫る野方久保遺跡で集中作業。盆休み前に廐土の移動を済ませたので早速遺構検出にかかる。
14 火 晴れ	長い盆休みは終わったが、まだ発掘作業員の参加少ない。A地区は明日の全体撮影のために清掃開始。
15 月 晴れ	方眼紙実測は残り1/5となる。測量終了した部分からレーリングにかかる。東西道路のB地区は、自然の落ち込みがあり東へ延長して掘り進んだが、地山面が上がり土路跡の溝曲部のようだ。
20 水 晴れ	午前中最初に元岡遺跡に行き、伐採した雑木、竹を取り除き、作業道を作る。すぐに女原遺跡に戻り、A地区的清掃を済ませ、午後全体撮影をする。東西道路のB地区の落ち込みは、土器では川と判断していたが、自然の廐土のようである。その辺近くに黒色土が堆積し、土器師の大さめの破片がまとまって出土する。その出土状況を撮影。
21 木 朝・夕	本序で定例の課会議。夕方、農業土木課と協議し、吉武遺跡調査開始を11月と決定する。
22 金 曇り	夜來の雨で気温が下がる。B地区廐土の排水後に遺物の取り上げ作業。農業振興課と現地協議。工事発注遅れて早くして9月中に以降から造成工事が開始。したがって発掘調査は遅くとも8月中で完了する必要がある。重機による耕作土剥ぎは、東排水路のD区に移動する。水田1枚を終了したが、耕作土下の黒褐色土にわずかながら遺物が出土。また小溝が弧状に北に延びてることから西側に少し抵避する。この小溝は包含層を切っているようにみえるが、慎重な発掘作業が必要となってきた。重機で土を剥いでいる元岡遺跡に2往復して作業指示。墳丘部に6世紀後半の須恵器や土師器が出ている。
23 土 曇り	九段研究会で常松君が飯盛遺跡を説明するので参加。その後、小郡市の生掛古墳現地説明会の見学に行く。
25 月 曇り	週初めなので安全教育を徹底する。B地区廐土の振り下げを継続し、明日に清掃と撮影を予定する。平板測量を始めたが、農業振興課は直角していない道路の中心点をまだ打っていないので実測方眼が組めない。明治大学の石川氏が野方久保遺跡に来訪、その後崎崎や丸山塚など両辺の古塚を案内する。
26 火 曇り	B地区撮影のためカメラ類を飯盛調査事務所より運ぶ。野方久保遺跡でも撮影するとのことで急いで遺物出土状況を撮影し、町道跡に移送する。遺物出土位置を平板圖に記入し、南聖の土層実測準備にかかる。重機は東排水路のD地区で耕作土剥ぎを継続しているが、南より2枚目の水田で遺構らしき構造を数枚確認。台風接近で天候悪化するが、期限が迫っていることから作業を続けるも、午後になって激しくなり作業を断念する。
27 水 曇り	台風の勢いを弱めながら雨が降り始める。B地区では一応終了したので、D地区南端部で溝の包含層がみとめれることから振り下げに着手する。重機はD地区の最北端部に進んでいる。黄茶色粘質土の地山は北に向かって急傾斜で落ち込んでいる。野方久保遺跡では、遺構美術部が周辺測量を始めることから、トランシットを移送する。
28 木 曇り	中国大陸に向かっていた台風が進路を変えて九州接近中、風が強くなり雨も降り出しそうだが、D地区の発掘作業を怠らず。D地区は本日に南から1枚目の水田部終了。重機は昨日午後より東西道路のC地区に移り耕作土を剥いでいるが、住居跡と思われる落ち込みがある。そのプランからすると3軒の住居跡が切り合っているようである。さらにこの西側で落ち込みがあり、明治土層実測を予定する。午後早いよ雨蹴りなく作業廻し。プレハブの出土遺物の水洗いをする。
29 金 快晴	台風もややかな朝となる。空気はすっきり秋。D地区南より2枚目の水田部の遺構検出作業。同時に1枚目の水田から1/50縮尺で平板測量に着手。C地区では住居跡らしき落ち込みを確認したので、さうに北側に拡張する。土層の実測は終了。午後飛高係長と飯盛遺跡の発掘方法について協議する。その後、元岡遺跡に行き、地主、工事業者と境界杭を確認する。
30 土 晴れ	いいよいよ期限が迫り、発掘作業は迫り込み。D地区では鉄塔近くの発掘区に移動。ここでは2条の小溝と無数の足跡らしき痕跡がある。重機は本日までないので深いトレチアなどを埋め戻して調査終了後の安全を確保する。C地区的住居跡は切り合いで不明瞭なので慎重に振り下げを続ける。野方久保遺跡は無事に発掘調査が完了する。
9月	
1 木 快晴	定例課会議で発掘作業は休みだが、元岡遺跡に発掘機材を運ぶ。本序で農業土木課と吉武遺跡後に調査予定の早良区堀留墓遺跡の開始日について協議する。夕方、「早良王墓展」の原稿類を歴史資料館に届ける。
2 火 晴れ	最後になってC地区で住居跡が出てきたことから、8月末の発掘期限を数日延期する。3軒の切り合いで予想したが理土が薄く、切り合いで確認はまとめて困難。慎重に振り下げを続ける。夕方飯盛調査事務所に移り、常松、加藤君と「早良王墓展」図録用の資料作成。深夜2時に及ぶ。
3 水 曇り	D地区的平板測量図を点検、修正して完成。急ぐ。C地区の切り合った住居跡は、長方形の住居跡1軒であった。周辺も清掃して3時に撮影終了。1/20実測の方眼を組み、平板測量も始める。
4 木 晴れ	発掘機材を飯盛調査事務所と元岡遺跡に引っ越し開始。C地区住居跡の実測終了。平板図の等高線記入も終了。機材搬送の間に出土遺物の水洗作業をする。
5 金 晴れ	歴史資料館で「早良王墓展」の図録打合せ後、女原の地元関係者に発掘完了の挨拶に回る。
8 月 晴れ	朝、発掘作業員は女原に集合。残った道具類を元岡遺跡に運び、元岡遺跡の発掘開始。

第3節 各地区的調査（遺構と遺物）

1. A地区（水田部）

圃場整備造成工事計画図によると水田6-3は、今回の圃場整備内の南寄りに位置している。現在の水田5枚を合わせて完成時には面積2,810 m²の長方形区画となる。試掘調査ではT1~4のトレーニングを設定して旧地形の復元や遺構検出を行い、その結果については7頁に記している通りである。T3を設定した水田は、周囲の4枚の水田よりも約60~90 cmと一段高く、その分、造成工事で遺構面よりも深く削平されることから、発掘調査の対象地とした。この水田の面積は約700 m²で、試掘によると現耕作土より約15 cm下の暗黄色粘土層でピットや土壙を検出確認している。

発掘調査では、重機で耕作土を剥ぎ取り、統いて人力で遺構検出作業を行った。同時に全城に5 m方眼を組み、北東隅から南へA~D列、西へ1~4列とし、A1、B2グリッドのようにグリッド名を付けた。

発掘作業では、試掘で確認した通りに暗黄色粘土が全面に広がり、これを遺構面とした。この遺構面は、等高線で分かるように南西から北東に向かって緩やかに傾斜しており、その比高差は約50 cmを測る。北東部のA・B1、2グリッド当たりにやや粘質を帯びた黒褐色土が堆積し、遺物を包含していた。

検出遺構 検出したのは、Fig. 8のように数多くのピットと11本の溝状の落ち込みである。ピットの大きさや深さはさまざまである。極端に大きく、かつ深いピットはない。また平面的には特に密集している様子はないが、南西から北東方向に幅約10 mで広がっているように見える。この遺構面は、すでに削平されていることが予想され、堅穴住居跡の周壁や床面が消失し、柱穴のみが残っている場合も想定してピット配置を間竿で何度も探ったが、堅穴住居跡や掘立柱建物跡のように明確な遺構として認定するには至らなかった。調査終了後にFig. 8 遺構平面図で再度試みたところA3グリッドで6個のピットがほぼ直線、直角に並んでいるのに気付いた。発掘中の確認ではないので観察不足であるが、掘立柱建物跡SB01として図化した。

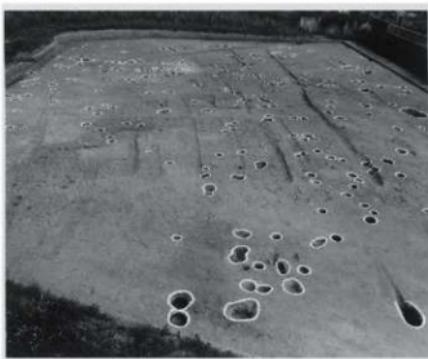


Fig.6 A地区の検出遺構全景（西から）

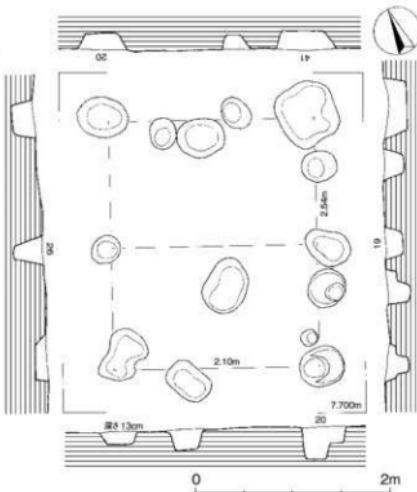


Fig.7 掘立柱建物跡 SB01 (縮尺 1/50)

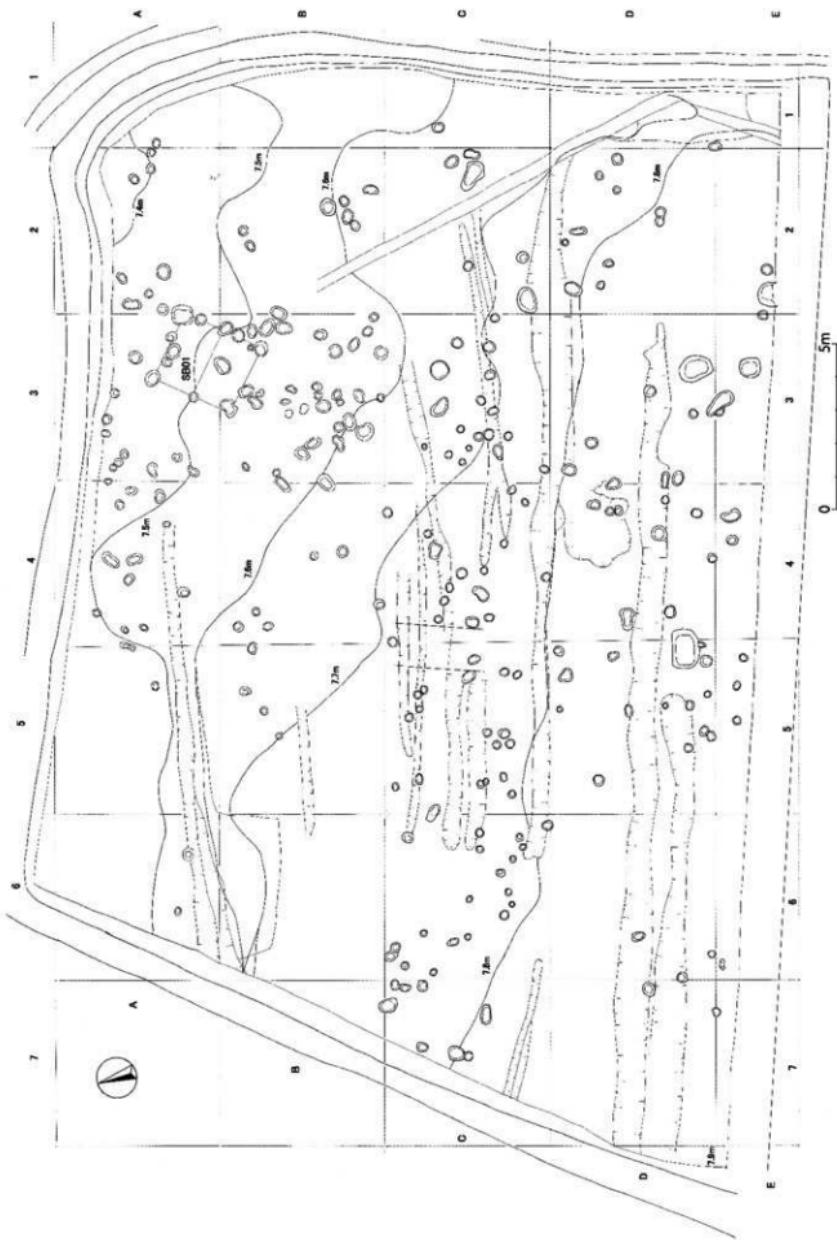


Fig.8 A地区の遺構平面図 (1/150)

掘立柱建物 SB01 Fig. 7のように1間（心身2.10m）×2間（心身2.54m）の規模となる。各柱穴の平面形は同じではなく、深さも13～41cmと均一ではない。第1次調査では、掘立柱建物跡1棟が検出され、1間（心身3.2m）×2間（心身4.2m）の南北棟で、中世と推定されている。今回は無遺物で時期を確定できない。

なお溝状の浅い落ち込みは、埋土がピットの上に乗り、また水田区画とほぼ平行していることなどから、畝溝のような後世の耕作に伴うものと判断した。

出土遺物 A地区的出土遺物は、主に発掘区北東隅A・B1、2グリッド周辺に堆積している黒褐色土から出土したもので、その重さは約4kgを計る。なおピットのほとんどは無遺物であった。古墳時代の土器に数点の中世の遺物が混ざっており、縄文、弥生時代の遺物は含まれていない。完形品や接合可能な土器がなく、しかも細片のために実測できたのは高杯や甕、中世の土鍋など9点に過ぎない。このように細片化したのは、生活跡からの直接廃棄による堆積ではなく、開田や整地など後世の移動結果ではないかと思われる。なお図示した器種の数が全出土土器の器種比率を示すものではない。他の地区の出土遺物も同様である。

1は小形丸底壺で口縁部を欠くが全体の3/4が残る。器面は摩耗が進み、胎土に含まれている1mm大の砂粒が露出している。胴部最大径は9cmで、その位置は中位よりわずかに上にあり、やや張りがある。口縁部は直線的に外反しているが、内面はわずかに回んでいる。内面は赤茶色、内面は茶色を呈す。胎土に1mm大の砂粒を含んでいる。2～5は高杯の脚部で、いずれも破片。2は3と同じような充填式の接合法から高杯としたが、杯部内底が丸く凹み、また脚部は通常の高杯よりもより開きが大きく、他の器種か。充填した土は直径21mmの球形で上面を強くナデしている。砂粒の少ない胎土だが、それ程きめ細かくはない。外表面とも茶色で、脚部外表面の調整はタテナデ。3の接合法は厚さ約8mm、径約1.4cmの円盤状粘土を詰め込んでいる。また脚上端外面は小さな段を設け杯部接合の安定を図っている。脚裾部への移行近くに焼成前に穿つ

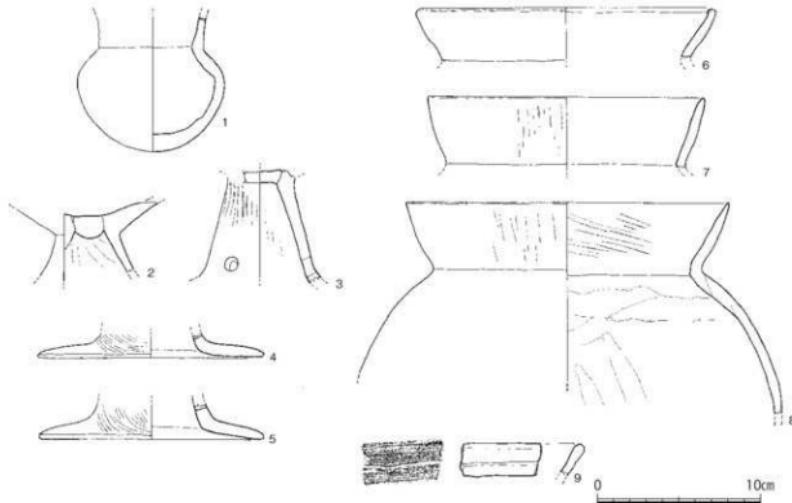


Fig.9 A地区的出土遺物図 (縮尺1/3)

た径9mmの円孔があり、元は3か所に穿っていたようである。内外面とも赤茶色で精良土が用いられている。外面はミガキ状の丁寧な横ナデの後にタテハケ目を加えている。4、5は高杯脚裾部。径は4が14cm、5が15.6cm。同じように脚柱部から強く屈曲し、水平に近い裾部をなす。ともに胎土に精良土を用い、内外面とも赤茶色を呈する。外面は粗いハケ目後に横ナデ。屈曲部に小孔が認められる。2点とも胎土や器面調整、器形の特徴など一致することが多いが、ここでは別個体とした。6～8は甕の口縁部。6は10cm程の小片を図化した。口径18.4cmで、微妙に内湾しながら外反し、端部内面に小さく折り返したような断面である。内外面ともきわめて丁寧な横ナデ調整を施す。7は口径17.7cm、直線的に外反しているが器壁が外面に膨らんでいるため、内湾したような外見となっている。口端部は細丸の断面で、外面には粗い上下方向の条痕がわずかに認められる。8は口縁部と胴上半部を残している。A地区では甕の胴部破片も数多く出土しているが接合出来ず、8は珍しい例である。口径20.1cm、くの字形に外反する口縁部はわずかに内湾気味にのび、端部は強く引き出したように先端が尖り氣味となる。粗いハケ目後に横ナデ。胴上部内面と器壁には粘土の接合痕を見ることが出来る。摩耗して不鮮明だが、内面は左上がりのヘラ削りか。9は畠溝のような浅い溝状の落ち込みから出土し、その時期を推測する上で参考になることから小破片ながら図化した。口縁端部を外に折り返して肥厚した帯状の断面となる。内外面とも横ナデ調整。中世の土鍋を推測したが、薄手の器壁である。破片のカーブはかなり大きな口径を予想させる。

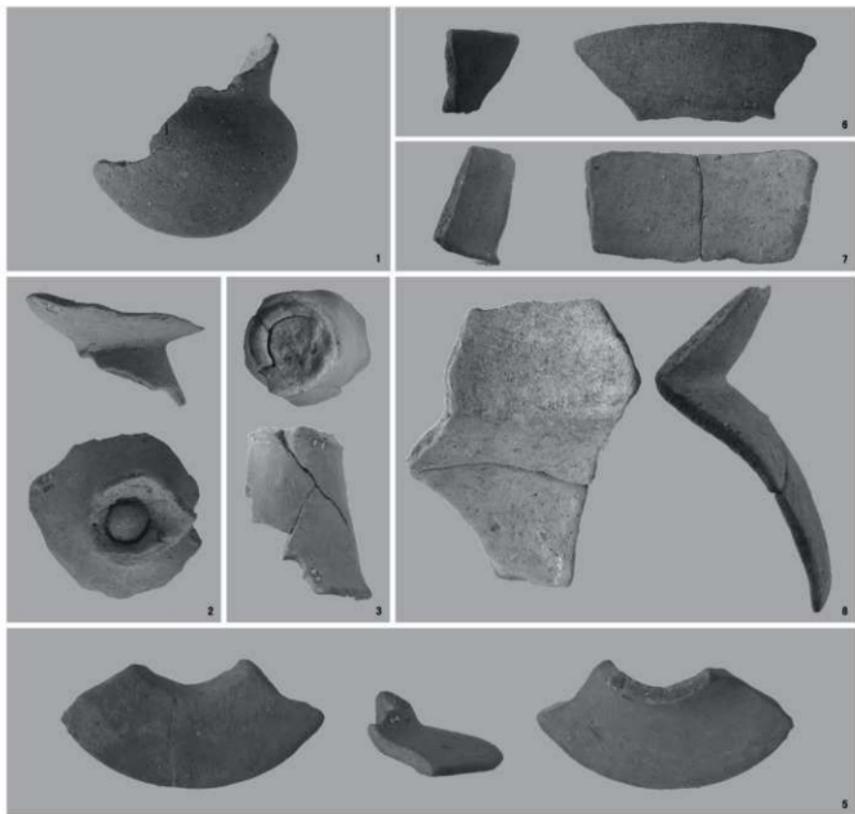


Fig.10 A地区の出土遺物（縮尺1/2）

2. B地区（東西道路西端部）

圃場整備地の東西には、既に南北方向の道路があり、これを結ぶために事業地のほぼ中央に東西方向の道路（幅5.05m、長さ102m）が新設されることになった。また現在の水路は、水田の形に沿って北流しているが、これを直線化して東西道路の中央部を横切るという設計である。B地区を完掘するには、現在の水路と新設水路との切り替え完了が前提であるが、工事発注前では不可能である。また造成工事計画図通りの道路幅を確保して発掘するには、現水田の畦畔や崖面を切断することになり、夏の集中豪雨や台風の時期だけに崩落や出水など災害の原因となりかねない。また圃場整備では現耕作土を再度利用するために他の廃土と区別する必要があり、その置き場の確保が不可欠になるなど、通常の発掘調査とは異なる制約が多いものである。

そこで水路や畦畔を壊さないで、可能な限りの発掘面積を確保することにした。まず試掘調査で微高地と推測した東西道路の西端から耕作土剥ぎを始め、自然流路や湿地との境を把握して、必要に応じて拡張することにした。なお地区名は、中央水路より西側を**B地区**、東側は別の微高地が予想されることから**C地区**と呼び分けた。さらにそれぞれ東、西端から5mグリッドを設け、中央水路に向かってA、B、Cグリッドのように呼んだ。

検出遺構 B地区に最も近い試掘調査トレーニチであるT4では、微高地の地山面は、現耕作土より約30cm下の暗黄色粘土となっている。重機で水田耕作土と水田床土を剥ぎ、次に地山面での遺構検出を行った。この結果、地山面は西端より東に向かってわずかに傾斜している。検出した遺構は、溝SD01だけである。この溝SD01よりさら東に掘り進むと、Fグリッドで約10cmほどの小さな段があり、そこからさらに東へ約5mの位置で、深さ約65cmの落ち込みとなった。土層図で分かるように各土層は、西側から埋まり始めているが、何度も流れが変化し絶えず浸食、堆積を繰り返していた状況ではなく、ほぼ水平に安定している。落ち際が東側に湾曲していることからすると、谷開口部方向に流れ落ちるのではなく、大きく湾曲した場所に当たり、溜まり状になっていたためにほぼ水平な堆積土層を形成したと推測した。

遺物は主に12層の灰黒色粘土と13層の黒色粘土から出土し、特に13層に大きめの破片が含まれている。西寄りの底部砂層上には写真のようにFig.14、16の12、14～17、21～26、37、38の土器がまとめて出土した。

溝SD01 幅約40～80cm、深さ約15cmで、微妙に蛇行しながら東に約23mのびている。断面はU字形よりも箱形断面に近い。埋土は濃茶褐色土で遺物は出土していない。他にピットなどの生活遺構がないことから、最初は雨水が流れ落ちた自然の溝と考えたが、その方向が等高線にはほぼ沿っていること、つまり谷部方向とは直交することになり、やはり自然作用ではなく人為的な遺構とすべきと考えたが、溝の目的を明らかに出来なかった。試掘調査では、付近に湿地が予想されていたことから、水田跡の可能性も想定して、畦畔や足跡、水利溝などを探した。しかし何一つなく、溝SD01解明の手懸かりを得ることが出来なかつた。

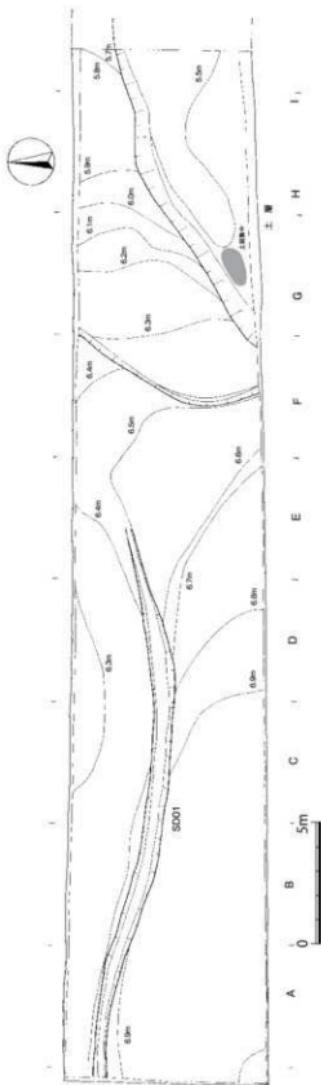


Fig.11 B地区的遺構平面図（縮尺1/200）



Fig.12 B地区の南壁土層図 (縮尺1/80)



Fig.13 B地区の南壁と遺物出土状況

出土遺物 図示した29点のうち13点は、出土位置をFig.11の網点で示しているようにまとめて出土した。10～14は小形丸底壺。10は胴部の大半を欠くが傾きや11.4cmの口径から小形丸底壺とした。強く外反する口縁部は短く、内面はわずかに凹む。全体に摩耗が激しい。11の口縁部は直線的に長くのび、細かい口縁端部となる。口径9.2cm。精良土に近い胎土だが、器面の調整は丁寧さを欠く。頸部外面にナデ消されたハケ目がわずかに残る。12は球形に近い胴部で、厚めの器壁である。胴部中位の最大径は9.6cm。胴部の上下で胎土が異なり、上半部は精良土を用いている。胴部外面は粗いハケ目をナデ消している。13は頸部との接合部で剥離している。やや尖り気味の底部が特徴。胴部の最大径位置は中位よりわずかに上にあるが、球形に近い。内外面とも茶色で、外面中央部に黒斑がある。14は接合しないが胎土、焼成、器面調整など類似点が多いことから同一個体とした。扁球形の胴部に小さく外反する口縁部が付く。口径13.4cm、外面は赤茶色、内面は茶色を呈する。内外面とも剥離が多いが、胴上反部の内面は左上がりの削り。外面は割りに丁寧なナデ調整で滑らかな器面である。

15～17は甕。15は胴部下半を欠くが、張りがなく長胴気味。口縁部は外溝しながらのび、端部内面はわずかに凹む。外面には部分的にハケ目が残る。胴部内面は右上がりのヘラ削り。16は口径13.6cm、外面とも濃茶色で焼成良好。屈曲部内面は指押さえている。胴部上半部の内面は横の削りだが方向が不鮮明。胎土は小砂粒が多い。17は口径16.5cm、胴部最大径21.1cmと大きめの器形である。屈曲部の器壁は厚みがあり、外湾気味の口縁部が付く。器面の調整は口縁部は横ナデ、胴部中位はタテハケ目、内面は上半が左斜行のヘラ削り、その下方は横の削りだが方向は不鮮明である。18は最も口径が大きく15.6cmを測る。よく締まつた頸部から大きく開く口縁部が付く。内面に粘土接合痕が浅く凹んでいる。器面は内外面とも茶褐色で、胎土は粗い。口縁部外面にタテハケ目がわずかに残っている。19、20は二重口縁壺。19は実測出来ないような

小破片だが、二重口縁であったことから図化した。外面は赤茶色、内面は茶色。屈曲部の器壁は厚めで、口縁部への屈曲は丸みがある。口縁端部を欠くので口径不明だが、20よりも小さい。20は口径18.6cm、内外面とも茶色で、胎土の砂粒はきわめて少ないが精良土ではない。口縁部の立ち上がりはわずかに傾いており、外面は横ハケ目後に横ナデ調整。屈曲部は鋭さがほとんど欠いている。

21～37は高杯だが、いずれも破片で全形を知りえるものはない。21～28は杯部で、うち21～23は杯部の器形が分かる。3点とも中位より下方で屈曲して大きく開く口縁部となるが、その屈曲部は鈍く、明瞭な稜とはならない。21は口径20.2cm、粘土接合部で剥離している。22は口径21.4cmと大きな杯部で深みがある。内外面とも茶色でハケ目が残る。23は杯部だけだが完形品で口径20.7cm。口縁部の開きが大きくなっている。胎土に砂粒はほとんど含んでいないが精良土ではない。内面は粗いハケ目調整。脚部の接合法が分かる。24は杯部の下半のみの破片。全体に摩耗しているが、杯部内底はナデ調整か。25は内外面とも薄茶色で、

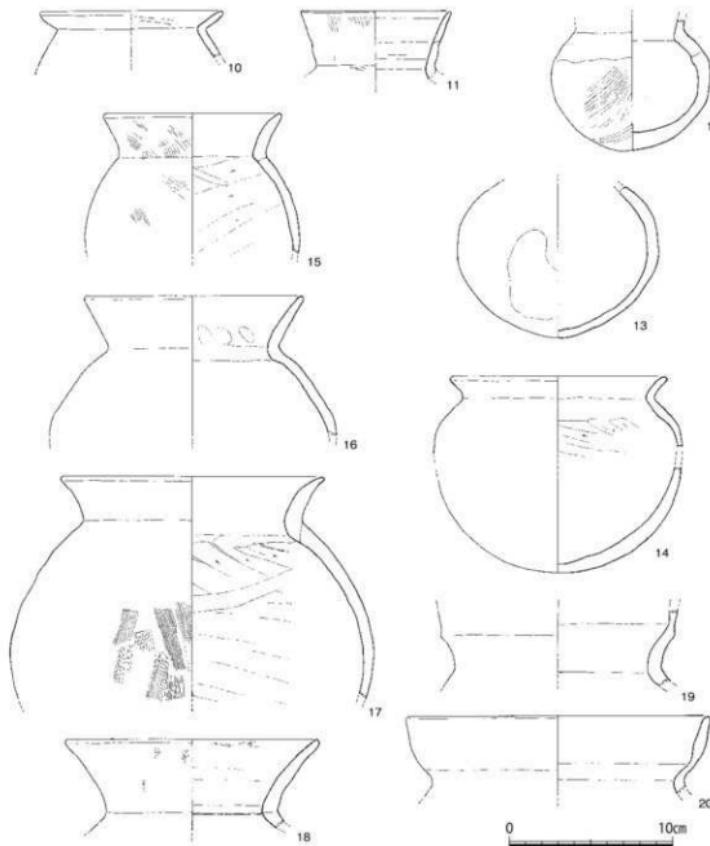


Fig.14 B地区の出土遺物図① (縮尺1/3)

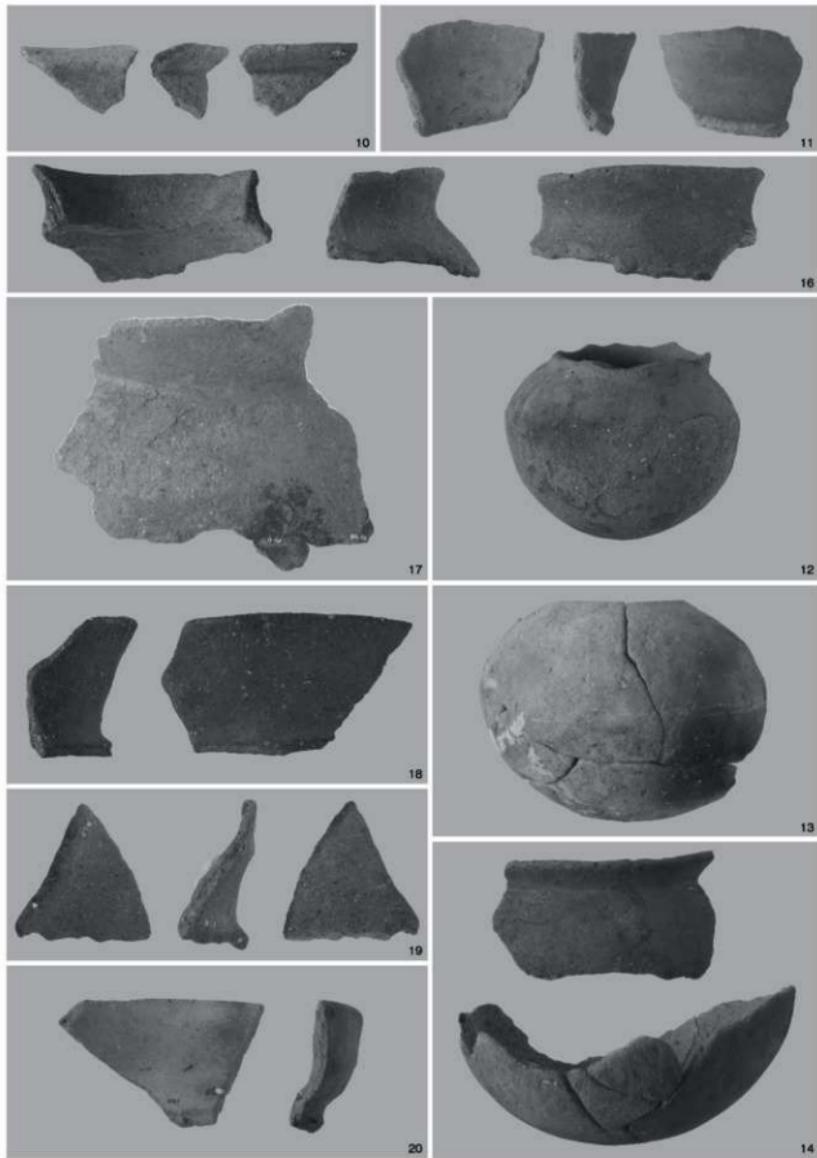


Fig.15 B地区の出土物① (縮尺 1/2)

器壁内面は灰黒色である。杯部内底には計3cmの円盤状の粘土を詰めて脚部と接合している。26は屈曲部から剥離している。外面はハケ目をナデ消している。27も同じような脚部接合であるが、中央に径4mmの小孔があるのが特徴。28の杯部内底がほぼ水平で、外面は濃褐色、内面は赤茶色を呈する。器面は内外面ともナデ調整。29は脚接合部が円形となっており、径25cmの粘土を充填したことが分かる。砂粒を少量含むが精良土に近い。30～35は脚部。30の杯接合部の径は4.8cmと大きく、脚柱部も短く、内面で強く屈曲して裾部となることから、別器形か。31の脚柱部は中位でわざかに外側に膨らみがある。32は高杯接合部から八字状に開き、さらに裾部は大きく開く。胎土の砂粒は少ないが緻密ではない。33は裾部を欠くが、脚柱部の開きが大きく、短い脚部となっている。34は膨らみが弱い円柱状の脚部で、厚めの器壁である。摩耗

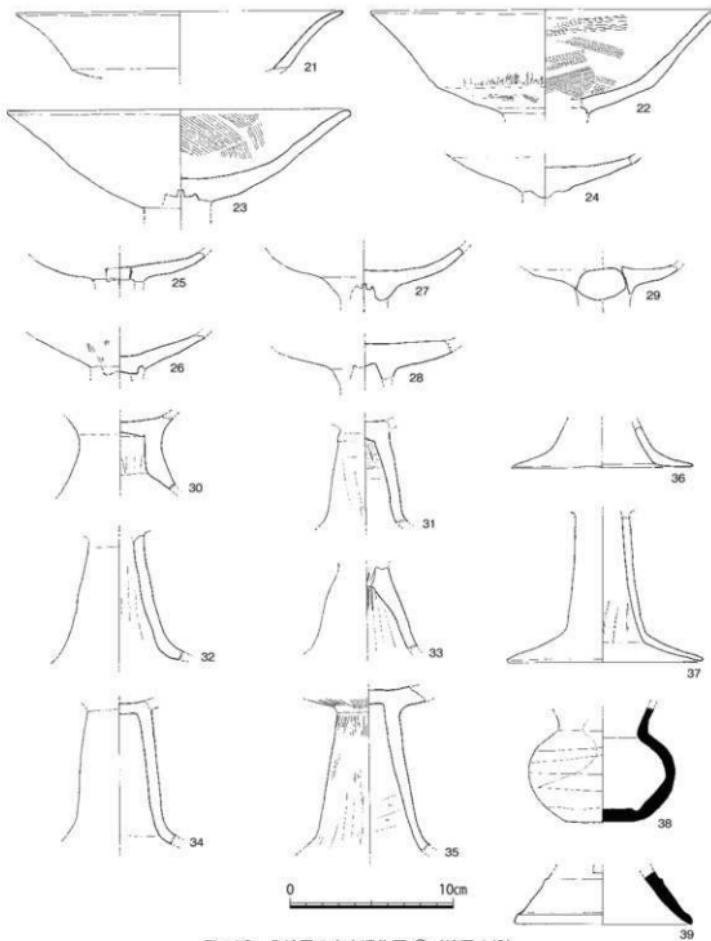


Fig.16 B地区の出土遺物図②(縮尺1/3)

で小砂粒が露出し、粗雑な印象。35は長めの脚部で、外面にはハケ目が残る。また幅5mmのヘラ状工具でタテナデしている。他の高杯脚部に比べ古い特徴を持っている。36と37の2点は据部が分かる破片。ともに大きく開く据部である。36は屈曲部がやや肥厚している。

38,39は須恵器。38は壺で口縁部を欠いているが、頸部より下は完形。平底気味だが幾分丸みがあり不安定。胴部最大径は8.9cm、胴部中位まで自然釉が見られる。外面は横ナデだが、回転が鈍い。39は高杯の脚根部。外面は灰色、内面はやや灰色が濃い。脚端部はわずかに厚みがあるが、先端の断面は丸細となっている。脚端部径は19.8cm。器壁断面に透かしの切り込みが残っている。B地点より南東約1kmに5世紀後半～6世紀初め頃の須恵器窯として知られる新開窯跡があるが、新開窯出土の高杯脚端部は、嘴状に尖るものや端部外面に鋭い突帯を巡らせているが、39にはその特徴がない。

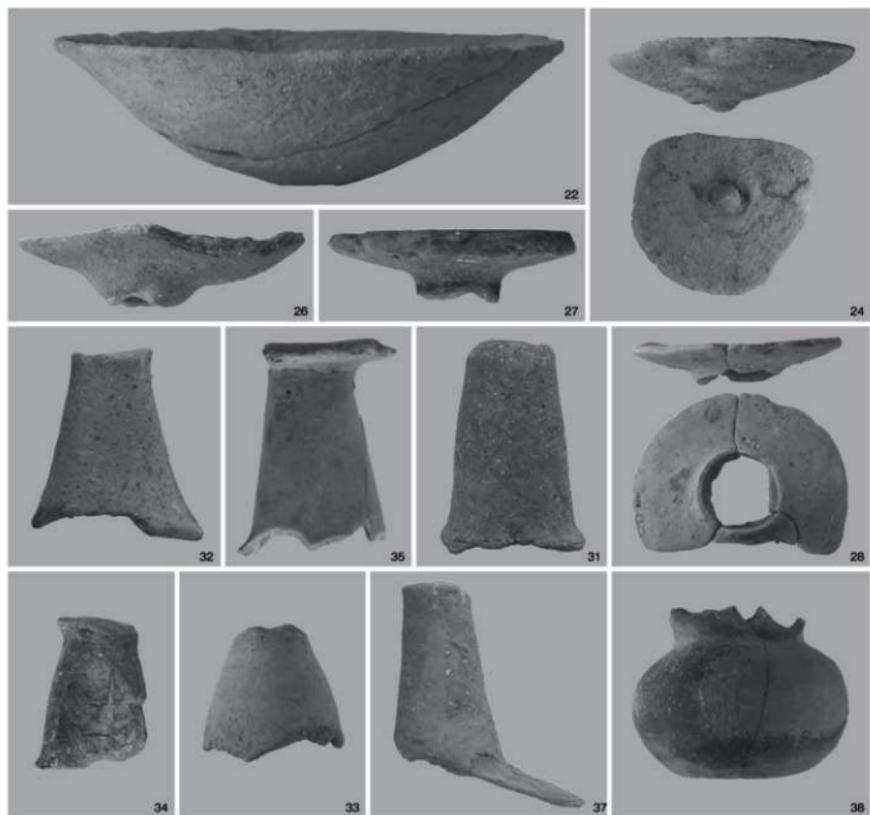


Fig.17 B地区の出土遺物 ② (縮尺 1/3)

3. C地区（東西道路東端部）

Fig.19では発掘区が道路幅4mの長方形になっていないが、これは現在の水田区画に制約され合せた結果である。すぐ北側の水田は68cmと一段低く、同時に耕作土を剥ぐことが出来なかつたので、まず上段水田で遺構の残り具合を見ることにした。B地区と同じように5mグリッドを組んだが、B地区とは逆に東側から中央水路に向かってA、B、Cグリッドと呼んだ。地山面は視覚的には水平に見えるが、等高線は西側に向かってわずかに傾斜していることを示している。

C地区東端の土層は、1層が耕作土、2層が茶褐色土、3層が黒褐色土で、茶褐色土が地山となる。現地表からすると約50cmと深く、遺構の検出を期待した。東端よりすぐ近くで濃茶褐色土の落ち込みが現れ、約10m程西側に広がっていた。その輪郭を追うと少なくとも複数の堅穴住居跡が重なっていると思われた。そこで慎重に土色を観察しながら輪郭と切り合を精査したところ、堅穴住居跡SK01と堅穴SK01の二つの遺構であることが分かった。またCグリッドの北縁では、コーナーのみだが方形堅穴と思われる遺構を検出した。D～Fグリッドでは幅8.5m、深さ45cmの落ち込みがあり、土層の堆積状況から北流する自然流路と推測した。土層断面では、7、8層に土器片が認められるが、小破片のため図示できたのはFig.22の**40**のみである。**40**は口径7.8cm、器高7.7cmの小形丸底壺。全体が摩耗して砂粒が露出している。体部の膨らみは小さく、口縁部は直立し、端部は細丸の断面となる。

頭部内外ともに指押さえ痕が見られる。

検出遺構と出土遺物 検出した主な遺構は、堅穴住居跡1軒、堅穴2基、ピットである。ピットの多くは堅穴住居跡周辺で検出したが、発掘区が狭いこともあり遺構と認めるようなまとまりはない。

堅穴SK01 検出当初は、東西壁が直線であったことから、3軒の方形堅穴住居跡が重なっていると判断した。しかし壁の立ち上がりが直ではなく斜めであること、南壁が直線ではなく不規則な曲線であること、さらに底面が平坦ではなく鉢状で、柱穴らしきピットも見当たらない



Fig.18 C地区の全景

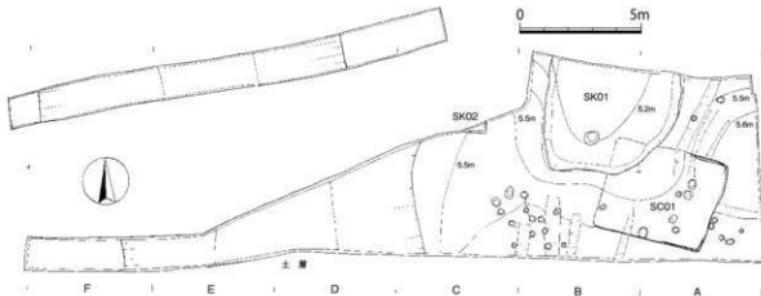


Fig.19 C地区の遺構平面図 (縮尺1/200)

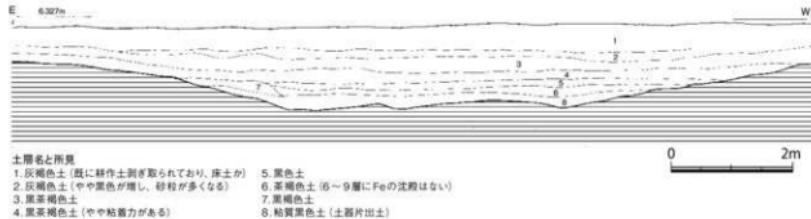


Fig.20 C地区の南壁土層図 (縮尺 1/80)

ことなどから、堅穴住居跡ではなく用途不明の堅穴とした。埋土には上層の黒茶褐色土が混入しており、A地区の耕作時と推測した浅い溝と同じような埋土であり、明らかに堅穴住居跡SO01を切っている。北側崖面近くの埋土から小片だが近世の掘り鉢や奈良時代の高台付杯が出土し、開田や耕作時に掘り込まれた可能性が強い。

堅穴SK02 現水田の崖面に位置していることから遺構の大部分が失われ、南東コーナー部だけが残っている。東壁0.43m、南壁1.04mで、壁はほぼ直に掘り込まれておらず、深さは24cmを測る。底面は平坦である。遺物はきわめ少なく、図化出来たのは須恵器高台付杯と砥石の2点に過ぎない。

出土遺物 41は小片のため不正確だが高台貼り付けの須恵器杯で、その高台径は13.8cm。表面は灰色を呈し、やや軟質の焼成。割れ口も同じように摩耗している。底部の端に付いている高台は断面方形であるが、角は丸みがある。

42は砥石の破片。残っている大きさは、縦2.36cm、横2.27cm、厚さ1.05cm。緻密な粘板岩質の石材で、破損している面を除く3面が研ぎ面に使用されている。いずれも長年の使用が窺んでいる。

この2点の遺物だけで堅穴SK02の時期決定は困難だが、女原遺跡のこれまでの調査では報告例がないので取り上げておく。

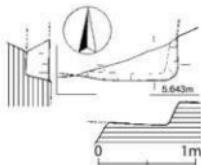


Fig.21 堅穴 SK02 (縮尺 1/50)

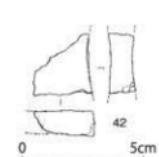
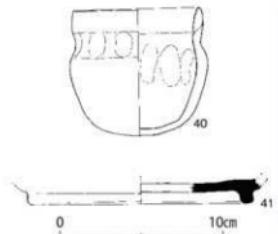


Fig.22 包含層と堅穴 SK02 の遺物図 (縮尺 1/2, 1/3)



Fig.23 包含層と堅穴 SK01 の遺物 (縮尺 1/1, 1/2)

堅穴住居跡 SC01 西壁と北西コーナーが完全に削平されているが、残った東、北、南壁で長方形の堅穴住居跡と分かる。壁の残りはきわめて悪く、加えて耕作時と推測した溝や堅穴で切られている。完全に壁の長さを知りえるのは東壁と南壁で、それぞれ3.70 mと4.44 mを測る。その南北両端のコーナーはわずかに丸

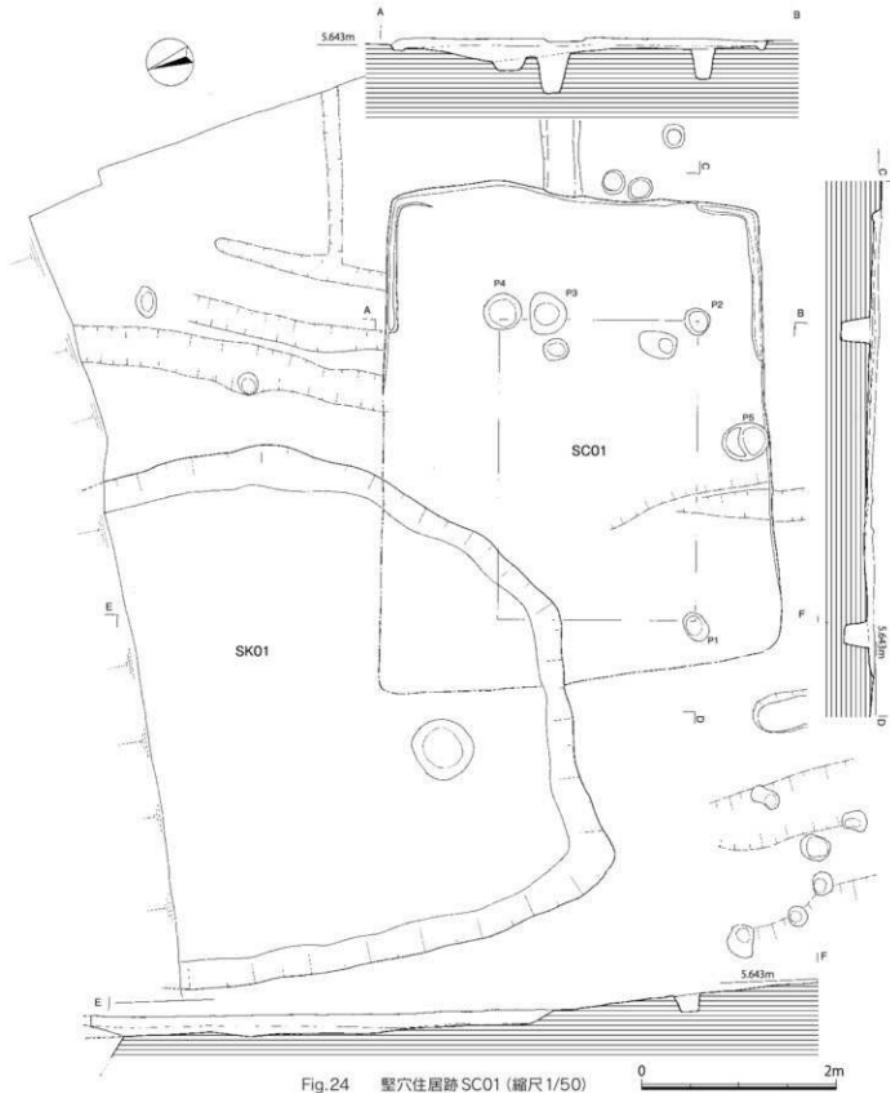


Fig.24 堪穴住居跡 SC01 (縮尺1/50)

みを持っている。南東コーナーは検出当初その位置を確認していたので辛うじて長さ南壁の長さを測ることが出来た。北壁は長さ2.07mが残るに過ぎない。残った3壁とも直線であるが、南、北壁ともにやや開き気味にのびており、整った長方形ではなく、西壁が長い台形状のプランだったのだろう。床面は後世の浅い溝で荒らされ当初の状態ではなく、床面上の土器や炭化物などはまったく認められなかった。北東、南東コーナーには幅約10cmの壁溝がL字形に掘り込まれている。床面からの深さは約3cmと深い。どちらの端部も繋がっていないことから、四壁に沿って全周するのではなく、各コーナー部だけに設けたのだろう。床面は浅い溝や小さなピットが数多く見られ凹凸が著しい。その中で主柱穴の可能性のある大きめのピットをP1～P4と呼び、どれを主柱穴とし、何本柱の構造であったかを検討してみた。

堅穴SK01で切られた北西部にピットがあったと仮定すると、ピットの位置や形状、深さなどからP1～3が直角となる。ただしP1はP2、3に比べると形が小さく、西壁に極端に接近している。撮影の際はP3を主柱穴の一つとして白線を引いているが、深さからするとP3よりもP4の方がP1、2と同じような深さであり、4つの柱穴を結ぶ範囲は床面で占める位置が偏っていない。

女原遺跡のこれまでの堅穴住居跡の調査例では、主柱穴配置が分かるものは少なく、あらためて柱穴配置や家屋構造などが検討課題である。P5は南壁のほぼ中央に接して掘り込まれており、他よりも大きく、深さもある。柱穴ではなく別用途の可能性を考えたい。



Fig.25 堅穴住居跡SC01(東から)



Fig.26 堅穴住居跡SC01(南から)



Fig.27 堅穴住居跡SC01(南東から)

出土遺物 壁や床面の残りが悪かったことから、床面からの出土はない。ここでは住居内の埋土から出土した土器6点を図示する。

43は底部を欠いているか、やや丸みのある胴部でそのまま丸底になるのだろう。口径14.8cmで、内面は右上がりのナデ、外面は逆に左上がりのナデ調整。外面は褐色、内面は赤茶色を呈する。44、45は高杯。44は杯部の下半で、脚部との接合法が分かる。器面は茶色を呈し、胎土に小砂粒を含む。焼成は特に良好ではない。外面は割りに丁寧なナデ調整だが、接合付近にはナデ前の櫛目状の痕跡が見られる。杯部内底はナデ調整を施す。45は高杯脚部で裾部を欠いている。杯接合部からハ字形に開き、さらに大きく開いてほぼ水平の裾部になるのだろう。器面は茶色で、胎土は砂粒少ないと精良土ではない。接合部外面には粗いハケ目が残る。46～48は甕。3点とも胴上半部の破片で、口縁部や胴下半部を欠いているが、丸底の球形に近い胴部にくの字状に強く外反する口縁部が付く器形であろう。3点ともに口縁部径は不明。46の頸部計は11.2cmで、屈曲部内面は丸みがあり、器壁に粘土紐の接合が見られる。口縁下部はタテナデ、胴上半部外面は横ナデ調整。胴部内面は幅0.7～1cm幅で右方向の削り。内外面とも茶色を呈し、胎土にわずかに小砂粒を含む。47の口縁部形状は不明だが、直線的にのびているのは45とよく類似している。内外面ともに茶色で、胎土に1mm大の砂粒を含んでいる。頸部径は13cm。45と同じように粘土接合が認められるが、器壁は厚みがある。胴上半部外面の調整は粗いハケ目の後に横ナデを加えている。内面は右上がりのヘラ削り。48の頸部径は17.4cmで、3点の中ではもっとも大きな器形であるが、器壁は逆に薄い作りである。胴上半部の調整は、外面が細かなタテハケ目で、ナデは加えていない。内面は粗雑なヘラ削り、方向が不明瞭だが右上がりか。内外面とも茶色で、胎土に1mm大の砂粒を含む。

これら6点の土器は堅穴住居跡SC01の埋土からの出土であることから、堅穴住居使用、廃棄時の状況を直接示す遺物ではないが、ここでは堅穴住居跡SC01を古墳時代中期初め頃と考えておく。

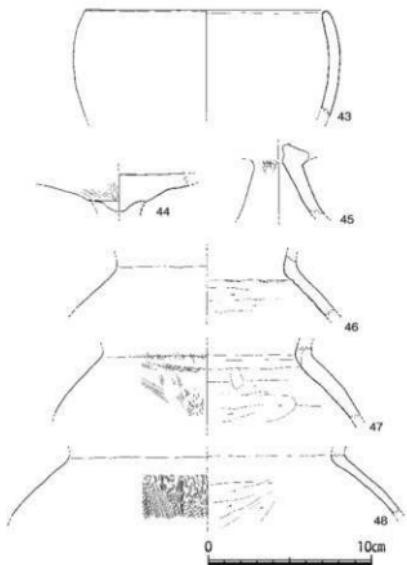


Fig. 28 壁穴住居跡 SC01 の遺物図 (縮尺 1/3)

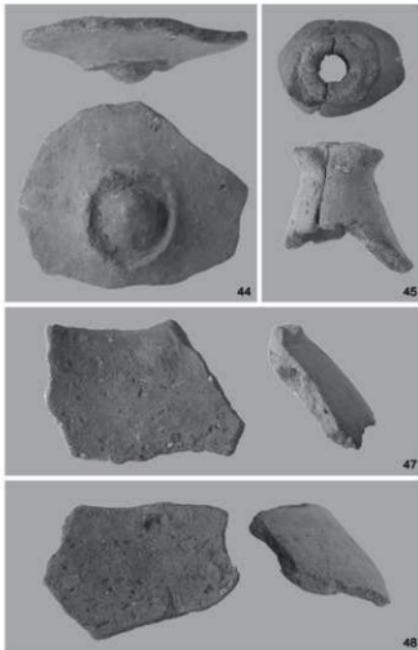


Fig. 29 壁穴住居跡 SC01 の遺物 (縮尺 1/2)



Fig.30 D地区の遺構平面図 (縮尺約1/300)



Fig.31 D地区の測量作業風景 (南から 遠方の山は今山道跡)

4. D地区（東排水路部）

東排水路は、水田1、2列目の間を北流するもので、途中の電力会社の鉄塔を避けて東側に健形に折れている。総延長83mであるが、屈折部は現水路と水田段落ちのために発掘は出来ない。完成時の水路幅は2m(45cmのコンクリート製)となるが、工事幅を考慮して幅約4.5mで耕作土を剥ぎ、5mのグリッドを組み南端からアルファベットを付けた。このD地区周辺には、T8~10の3本の試掘トレンドチが入れられており、微高地と自然流路（湿地）との境が波状に入り組んでいるものと思われた。しかし、C地区では古墳時代の竪穴住居跡SC01や古代と思われる竪穴SK02を検出、確認したことから、その境界ラインは波状ではなく、北西方向に大きく広がっている可能性が出てきた。するとD地区は、谷開口部に近くて低平地であることから、集落の中心部に近づくものと期待した。

検出遺構 現耕作面から約50cm足らずで暗灰色粘土の遺構面となり、ピットと溝SD02~07を検出した。ピットは掘立柱建物跡や竪穴住居跡の柱穴の可能性も考えて配置を検討したが、発掘区の狭さもあって遺構としては把握出来なかつた。ここでは6条の溝について記す。溝SD01は、検出当初は自然作用の溝と考えたが、断面が箱形で深く、下流側で直交する別の溝と連結し、さらに下流側で同じ連結を繰り返していることから人工的な溝と判断した。その機能は排水と推測はしたが、なぜ方向の異なる溝と繋がり、健形を繰り返すのか、その理由が分からず調査終了後までこの謎を解く事が出来なかつた。

溝SD02は、発掘区南端より北側12.5mから掘り込まれている。南端部は緩く曲がり、やや西に寄りながら北にのびている。調査区の一部を西側に拡張してその方向を確認したが、北側端部の様子は掴んでいない。おそらく次の溝SD03に繋がるのだろう。幅は1.0m前後、深さは23cm前後、北端の溝底は南端より約17cm低い。

溝SD03は、Fグリッドで発掘区を横切っている。次の溝SD04とは繋がっている。先に記しているように溝SD02と繋がっているかは確認していないが、両遺構の方向や接近位置からして、発掘区外で連結していた可能性は強い。断面は同じように箱形で、中央部での溝幅は1.04m、深さは44cmを測る。

溝SD04は、溝SD03から西側に約75度に枝分かれしてほぼ直線的に約19m北側にのび、さらに溝SD05に繋がっている。途中やや幅が狭くなる部分もあるが、ほぼ79cm前後の幅で、断面箱形をなす。南北端溝底の比高差は北が約20cm低い。

溝SD05は、溝SD03と同じように発掘区を東西方向に横切っているが、その方向は溝SD03と平行ではない。SD04が接する部分は、落水のためとは断定できないが段をなしている。中央部の幅は、1.5m、深さは23cm。SD03の溝底よりも48cm低い。

溝SD06は、鉄塔の東側発掘区で検出した。北側約1.8m離れた溝SD07と並んでいるが、溝SD07に比べ両肩が平行せず、小さく弯曲している。どちらも深さが7cm前後しかなく、SD02～05とは異なる。中央部の幅は85cm、溝底は東側が7cm低い。直線ではないがその方向からすると溝SD05の延長部と思われるが、溝底は溝SD05が約80cm低い。

溝SD07は、今回の発掘区では最も北に位置する。中央部で幅1.86m、深さ約7cm。溝底は東側にわずかに傾斜している。



Fig.32 D地区の出土遺物① (縮尺1/2)

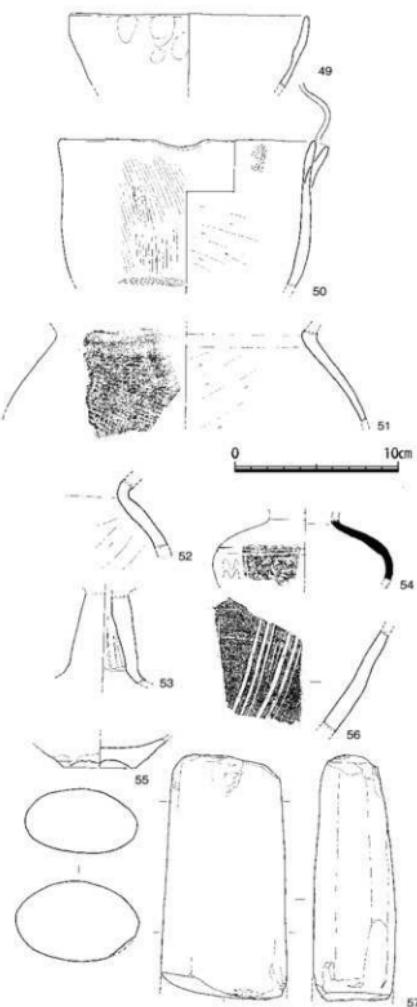


Fig.33 D地区の出土遺物図 (縮尺1/3)

出土遺物 49は口径14.6cmの鉢。口縁端部は内外面から指押さえで水平ではなく波打っている。胎土は精良ではないが、砂粒をほとんど含んでいない。50は口径15.1cm。瓶に類似した器形であるが、口縁部を外に押し出して注ぎ口を作っている。外面はタテハケ目、内面は上半部にわずかにハケ目が残る。下半部は左上上がりの削りである。51は甕の胴上半部破片で、頸部径は16.3cm。内外面とも茶色で、胎土に3mm大の砂粒を多めに含んでいる。器面調整は、胴部外面はタテハケ目後に部分的にナデを加えている。内面は左上上がりの削りできわめて雑な印象だが、焼成は堅い。胴部の下ほど器壁が薄くなっている。52は溝SD02出土の甕。頸部は強く外反するが、内面は丸みがある。口縁部にかけて内外面とも横ナデ調整。胴部内面は右上上がりの削り。53は溝SD04で出土した高杯脚部。精良土に近い胎土で、脚柱部は短めでわずかに膨らみを持

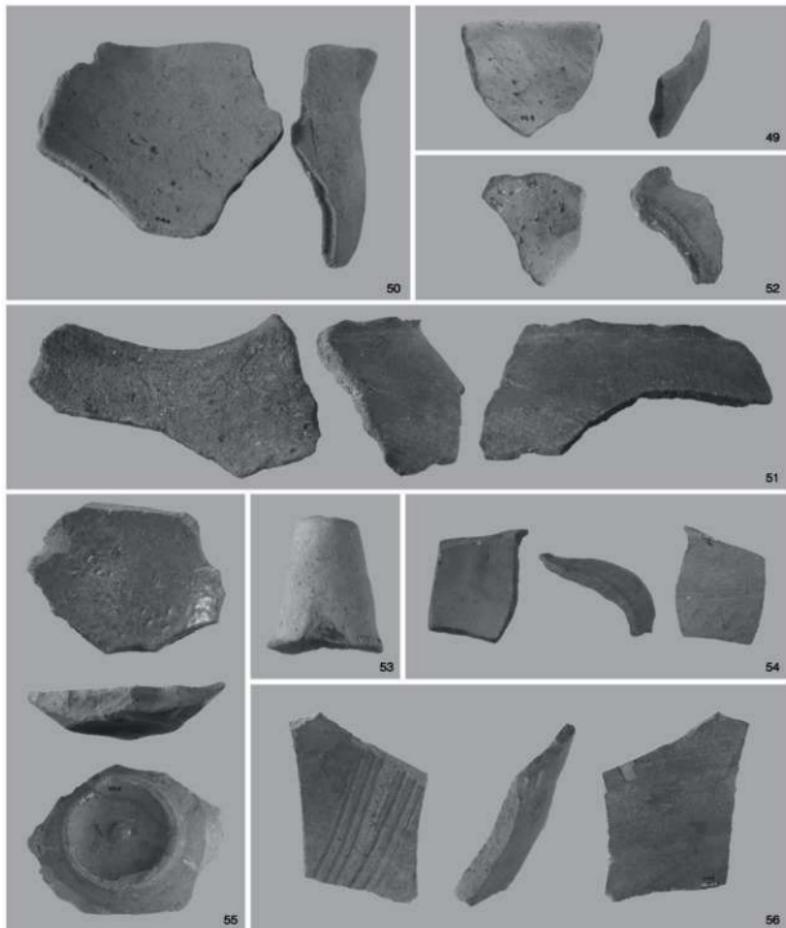


Fig.34 D地区の出土遺物②(縮尺1/2)

つ。脚裾部への移行は緩やかに折れている。内面は細い棒状工具で押されたような痕跡が見られる。**54**は溝SD04出土の須恵器。35cmの小破片なので傾きや径は不正確だが図示したような器形である。玉葱形の体部中位に細かな波状文を巡らしている。その上方の凹線は浅く鈍い。波状文は浅く不明瞭。破片なので体部に孔は認められないが趣であろう。新開窯跡出土の趣に比べると波状文や凹線が鋭さを欠いており、明らかに別の製作地であろう。**55**は溝SD04出土の唐津系の陶器。底部は雑なケズリで幅の狭い疊付となり、外底部中央はナデで少し盛り上がっている。内外面に灰緑色釉が掛けられている。外面の底部近くと底部は無釉で、露胎部は茶色を呈する。内外面とも施釉は均一ではなく、いかにも雑、発色も悪い。灰色の胎土は割りに緻密。体部は内底から緩やかにのび、4.5cmと底部径も小さな事から浅い鉢状の器形か。**56**は備前焼の掘り鉢で、溝SD04出土。内外面ともに紫色を帯びた灰茶色で、外面下半部は赤色を増す。外面に緑灰色の釉薬のような斑点があるが自然釉なのである。内面には幅の異なるクシ目があり、3本単位か。焼成、胎土とも堅致。内面は使用のためか相当摩耗している。**57**は今山の玄武岩を用いた太形蛤刃石斧で、刃部が欠損している。現在長14.7cm、重さ1.042kg。最大幅での断面は楕円形で7.6cm×4.8cm。表面は風化してやや軟質となっており、敲打や研磨痕は残っていないが、良く整った形状である。

第4章 おわりに

事前協議から可能な限り地下の遺跡を残す事を目標としたので、発掘対象地が限られて検出遺構は、堅穴住居跡1軒、堅穴2基、溝7条に止まった。しかし調査成果が小さかったわけではない。第1次調査同様に集落適地とは思えない谷部において各遺構を確認した意味は逆に大きい。特にこの地域が、前方後円墳や群集墳が密集していることから、当時の集落の様子を明らかにすることは、自ずと古墳被葬者の首長や、首長を誕生させ支えた社会的な構造とその権力の実態に迫れるからである。女原遺跡内で行った7次調査のすべてが谷部や開口部に当たるが、自然流路や湿地状低地、そして斜面など地形的な悪条件にも関わらず、堅穴住居跡や掘立柱建物跡などの生活遺構を発掘し、谷部利用の状況を把握出来るようになってきた。もちろん7次調査とともに遺構の数は希薄で、重要遺物も少ないように見えるが、細かく検討するときわめて特異な構造配置であることに気が付くだろう。その例として第2次調査の溝SD01～07の検出時は、その目的が不明だったが、第3、4次調査で確認された古墳時代堅穴住居跡の排水溝と同様の機能と推測でき、両地区を合わせるとかなり広範囲に張り巡らされていたことになる。同じような排水施設は、女原遺跡の西1.5kmに位置する飯氏遺跡でも発掘されている。福岡市内では、城南区田島B遺跡で弥生中期後半の堅穴住居跡が排水溝を付設していたが、女原遺跡や飯氏遺跡のように集落全体に及ぶ例はない。このような排水溝は、施工者の計画的な指示、命令、あるいは集落住人の同意と共同掘削の結果であろう。これだけで集落の特殊性、住人の出自や技能などと直結する訳にはいかないが、女原遺跡では排水施設を持つ堅穴住居跡群の近くに第3、4、6次調査で発掘された掘立柱建物跡群が存在することに注意したい。掘立柱建物跡の時期決定が難しいが、第3、4次調査のSB-03や第6次調査のSB-01は、他と異なる構造、規模であり、またこの調査区から朝鮮半島系の陶質土器や軟質土器が集中して出土しており、集落の性格を物語るものであろう。可耕地の狭い今宿平野において多くの前方後円墳や群集墳が築造された背景には、大陸や朝鮮半島に近いという地理的な有利性を活かしての対外交易、あるいは鉄製品など先進的な技術集団の支配や生産品の独占などの所産と考えるのが従来の説である。ところで首長やその一族、そして工人達の居住地は一体どこにあったのか。またどのような景観だったのか。今宿平野を見下ろす丘陵上を想定しがちだが、

女原遺跡のように谷部であっても排水施設を巡らした集落と掘立柱建物跡群、そして半島系遺物を出土する集落が、意外と解明の糸口を持っているようにも思える。なお出土土器については、重藤輝行氏の土器編年を参考にすると、古墳時代中期前半のⅢ期が大半を占めている。堅穴住居跡SC01の前後に、すぐ近くで丸限山古墳が築造されており、埋葬された首長の居館や古墳造りをした人々、そして技能集団の集落をぜひ掴みたいものである。

参考文献

- 重藤輝行 「古墳時代中期・後期の筑前・筑後の土師器」『地域の考古学』 佐田茂先生佐賀大学退官記念論文集 2009年
 常松幹雄 「九州地方の土器」『考古資料大観』2 弥生・古墳時代の土器 2002年
 久住猛雄 「地域概説 西日本 九州 ～九州における首長居館の成立と展開～」シンポジウム
 『古墳時代の豪族居館をめぐる諸問題』 1998年

報告書抄録

ふりがな 書名	みょうばるいせき ろく 女原遺跡 6								
副書名	第2次調査報告書								
卷次									
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書								
シリーズ番号	1274								
編著者名	力武卓治								
編集機関	福岡市教育委員会								
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8-1 TEL092-711-4667								
発行年月日	西暦2015年3月25日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 東緯	調査機関	調査面積 m ²	調査原因			
みょうばるいせき だいにじょうさ 女原遺跡第2次調査	ふくおかしにしみょうばる あはらだ 福岡市西区女原字原田	40135 0688	33° 130° 34' 15' 15° 58"	19860714～ 19860904	1622	圃場整備			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項				
女原遺跡 第2次調査	集落	古墳時代 古代	古墳時代－ 堅穴住居跡1溝7 古代－堅穴1	弥生時代－弥生石器/古墳 時代－土師器+須恵器/古 代－須恵器+石器/中世· 近世－土鍋+国産陶器	低丘陵に挟まれた谷部地 に営まれた古墳時代中期始 め頃の集落。排水溝が集落全 体に巡っていると思われる。				
要約	福岡市西区の女原園場整備第2期工事に伴う発掘調査。園場整備対象地は、今宿平野にのびる低丘陵に挟まれた谷部に当たる。第2次調査では堅穴住居跡は1軒と溝7条のみだが、女原遺跡でこれまで調査された7次の調査結果を合わせると、古墳時代中期初頭から集落が営まれていたことが分かる。3、4次調査では、排水溝が集落を巡るように掘削されており、2次調査でも同じような溝を発見し、かなり広い面積の集落と推測出来る。遺物は古墳時代の土師器がほとんどを占めているが、今宿産玄武岩製石斧が出土し、この地の開発の時期を示すのだろう。								

女原遺跡 6

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1274集

2015年3月25日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1-8-1 電話 092-711-4667

印刷 株式会社I・P

福岡市東区多の津1-5-7 電話 092-623-2812